

ゴブリンのいる国

明石雪路

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ゴ布林って何ですか?」

「ゴ布林はゴ布林だ」

モトラド（注・二輪車。空を飛ばないものだけを指す）に乗って旅人が吹雪を抜けたその先の国には、ゴ布林がいるらしい。

ゴ布林スレイヤーとその一行は、路銀を稼ぎたい旅人とゴ布林退治に向かう。

しかし、依頼を受けて石の街へ向かう中、かつての忌々しい刻印を見つける。

「覚知神か。厄介だ」

「ゴ布林ってパースエーダーも使えるんですね」

ゴ布林スレイヤー達と旅人とモトラドが、ゴ布林退治に挑む。

目次

吹雪の中で	1
森の中にて	4
街の中	7
冒険者ギルドにて	12
酒場にて	18
ゴブリンスレイヤーという男	22
村を襲ったゴブリンをスレイするお話	26
やっぱりこの世の者じゃ無かったお話	34
新たな依頼を受けるお話	41
襲撃	48
石の街探索①	57
石の街探索②	64
石の街探索③	71
石の街攻略①	78
石の街攻略②	86
石の街攻略③	94
ゴブリンのいる国　〜GOBLIN SLAYER!〜	102

吹雪の中で

真っ白だった。

「見える?」

男の子のような声で言った。

「見えない!」

張り上げて返事した声は、少し高い。

雪原を、一台のモトラド(注・二輪車。空を飛ばないものだけを指す)が走っていた。

周囲は真っ白、1メートル先も見えないほどに雪が荒ぶって降っている。つまり、吹雪いていた。

モトラドは荷物を満載していた。後部パイプキャリアには大きな鞆が載り、その上に燃料と水の缶、黒い液体の入ったボトルがいくつも並ぶ。後輪を挟むように両脇に箱が付いていて、ヘッドライトの上には丸めた寝袋が縛り付けられていた。

「すごい天気だねえ」

モトラドが言った。

「さっきまでの天気が嘘みたいだ。」

運転手が言った。

運転手は茶色のコートを着て、長い裾を両腿に巻き付けて止めている。首に黒のネックウォーマーを巻き、鏢と、耳を覆う垂れの付いた帽子を被り、ゴーグルをしている。その下の表情は若く、10代の半ばほど。大きな目を持ち、精悍な顔つきをしていた。

「キノ、引き返した方がいいんじゃない?」

「前に寄った国から大分進んだし、ここまで来たらもう戻れないよ。それに、ホラ」

キノと呼ばれた運転手は、ポケットから取り出した方位磁石をエンジンタンクに見せるように向けた。

「さっきから何故かずっとぐるぐる回ってるんだ。真っ直ぐ走ってきた自信もないし、どっちに向かえばいいか分からない。エルメスはどう?」

エルメスと呼ばれたモトラドは、うーんと唸って、

「どうかなあ、道路が見えて真っ直ぐ走ったつもりでも少しずつ曲がるものだからねえ、なんとも」

「仕方ない」

キノはそういうと、エルメスから降りた。

「おや?」

「視界が悪いなら走るべきじゃないや。一旦止まろう。もう雪も積もってきたしね」

「こんなところで?」

「こんなところで」

キノはキャリアーからシャベルを取り出すと地面を掘り始めた。

「何してるの?」

「穴を掘ってるんだよ。風よけにエルメスだけなのは心許ない」

雪を掘り、土を掘る。雪はかなり強くなり、息をするだけで喉の奥まで凍えるようだった。ネックウォーマーを上げ、口元を覆う。

キノはマツチを擦り、周囲からかき集めた木材や草に火をつけて、土を被せてすぐに埋めた。

「薪には向いてないけど仕方ない。これでゆっくり燃えるはずだ」

キノはその上にエルメスを倒して風よけにし、横になった。

「いつまでこうするの?」

「吹雪が止むまで。野盗が来ないと良いな」

「前の国で聞いたヤツね。トレーラーに乗って襲ってくるって。その人たちもこんな感じなんじゃない?」

「そうかもね」

「野盗に会うかもしれないのに、キャリアーに売るためのしょっぱい調味料詰んでさ。そこまですて行きたかったの?お菓子の国」

「お菓子で出来た家があるんだって。是非食べたい」

「ビルだったらどうする?」

「食べきれるかな…困るな」

「あつそ」

「それにしてもこの姿勢は辛いなあ。吹雪が止んだら早く起こしてね」
「エルメスがそれを言うの？」

森の中にて

「ここは…」

「一体どこなんだろうね」

一人と一台がいるのは、森の中、踏み固められた幅1.5mほどの道の上だ。

鬱蒼と茂る林間から太陽の光が線上に差し込んでいる。

木々の隙間から見える空は蒼色。ちぎれた雲がいくつか、ゆっくりと流れて行く。

モトラドの脇で寝ていた旅人は立ち上がり、周囲を見回した。

「さっきまで草原を走っていて、春の日差しが吹雪に変わって、今は森の中。飛ばされちゃったかな？」

からかうように言うモトラドに旅人が土を払いながら返事をした。

「それは困るかな。燃料も食料も余裕はあるけど、あんまり無駄に過ぎしたくない。」

「それもそうだ」

コートを脱ぎ、ゴーグルをつけると、旅人はモトラドに跨がってエンジンを掛けた。

「とりあえず進んでみよう。なにか乗り物が通った形跡があるし、人がこの道を使っているのは確かだ」

「どっちに行く？ 右？ 左？」

「どっちが良い？」

「一本道じゃわからないよ。コイントスで決めれば？」

「右にしよう」

「その心は？」

「なんとなくさ」

「さいで」

旅人は、モトラドのエンジンをかけようとして…

「！」

すばやく右腿のバースエーダーを抜いた。振り向いて後ろに照準、木の上から飛びかかる影に発砲した。

轟音ともいえる発砲音がして、ソレは地面に落ちた。

銃口から硝煙が立ち上る。カノンという、六連型・リボルバータイプのバースエイダーである。

「何？ その生物」

「なんだろう。初めてみる動物だ。」

旅人の目の前に、ピクリとも動かない死体が転がった。大口径の弾を頭部に喰らったため、首から上は吹き飛んで無くなっていった。

暗緑の肌、児童ほどの体型、少ない体毛。

旅人が言った。

「新種の猿かな？」

モトラドが返した。

「それにしては体毛がないね。腰巻きっぽい布を巻いてる。トンカチも持つてるみたいだし、道具を使えるって事は結構知能は高いのかも。」

「あと、群れて行動するみたいだ」

道の奥からこちらに走ってくる緑の猿。カノンを照準したが、旅人は反対側からも走ってくる気配を察知した。挟み撃ちする魂胆なのだろう。

旅人は腰の後ろからもう一丁バースエイダーをドロウし、反対側の猿に向けた。同時に発砲。二匹の緑の猿は、胸部に一発ずつ鉛玉を喰らい、痙攣した後動かなくなった。

「お見事」

「どうも。さて…」

今回はあまり死体を損傷させずに仕留めることが出来たが（カノンで仕留めた方は見るに堪えない）、やはり頭部をみてもわからなかった。

「結局なんだったんだろう。害獣かな」

「さあね。食べてみれば？」

「あまり食欲わく見た目じゃないよ」

旅人は改めてモトラドに跨がった。ゴーグルをつける。

「行こうか」

「そうだね」

モトラドが言い、旅人が返した。

旅人がアクセルを軽くあおるとエンジンは快調に吹け上がる。

モトラドが走り出した。三つの緑の猿の死体はやがて見えなくなつた。

街の中

森の中を走ることしばし。

旅人に乗せたモトラドは、森を抜けて草原にでた。

青々とした草原に、一本道がずっと続いている。遠くの方に牛が数十頭、群れの近くに母屋と、平屋の一軒家が見えた。牧場と、牧場主の家だろう。

運転手が言った。

「入国審査とかはなかったけど…。もう国の中に入ったのかな」

「かもね。もしかしたら不法入国で殺されちゃうかも」

「それは困るな。必死に逃げなくちゃ」

「それか、城壁で囲めないくらい広い国なのかも」

「それも困るな。三日で回れるかな。」

モトラドがずっと走り、やがて牧場が近くに見えてきた。

「ちようど良かった。ここで話を聞いてみよう。」

「燃料も心許なくなってきたしね。フレームとかハンドルはまだ大丈夫だよ」

母屋が近くなると、エンジンを切つて惰性で進む。旅人に乗せたモトラドはちようどドアの前で止まった。

周囲を見ると、木の柵と石垣が建物と道の一部を囲ってある。毎日点検されているのか、ほつれや穴は見当たらない。

旅人はモトラドから降り、声を上げた。

「ごめんください。どなたかいらっしやいませんか。」

待つことしばし。足音がドア越しに近づいてきて、

「ごめんなさい、お待ちせしました」

扉が開く。牛乳を煮たような甘い香りがふわりと旅人の鼻孔をくすぐった。

出てきたのは、一人の女性だった。年は20歳ほど。赤い短髪と豊かな胸が特徴的だった。

「こんにちは。旅の者です。こちらは相棒のモトラド」

「どうもね」

「モトラド?」

初めて聞く言葉を反芻する牛飼娘。

「燃料をいれて走る二輪車です」

「お姉さん、もしかして聞いたことない?」

「うーん…。ごめんね」

牛飼娘は困ったように言った。

「いえ、大丈夫です。あの、二つ尋ねたいことがありまして」

「どうかしたの?」

「ここは国ですか? それとも国ではなく独立しているんですか?」

「ここはもう国だよ。辺境だから中央の都市には遠いけどね」

「なるほど。ではもう一つ。近くに大きな町はありませんか?」

「この道ずつと行ったらあるよ。私も配達があるから、一緒に行こうか?」

「ではお願いします」

その後、荷車に商品を積んだ牛飼娘とモトラドを牽引する旅人は、並んで町に向かって歩いて行った。

「凄い、12の時から旅してるの?」

「冒険者という職業があるんですね」

「幼なじみが変わっててね」

「しゃべれるのは、おしゃべりだからだよ」

二人と一台が話しながら歩くこと半刻して、町に着いた。

「これは、凄いな」

「見たことない人種の人ばかりだね。いや、人じゃないのかな?」

旅人が街に入って最初の光景は、文字通り十人十色といえた。

街行く人のほとんどは只人なのだが、耳の長い人間や、猫耳が頭頂部に生えた人間?もいる。

上半身が、馬の下半身から生えている少女が買い物袋を片手に雑貨

屋の店主と話し、二足歩行の大蜥蜴が目玉をぎよろりと回しながら歩いている。何より驚いたのは、そう言った亜人と呼ぶべき生物が当たり前の様に日常を過ごしていることだった。

「今日は、お祭りとか、そういうハレの日なんですか？」

「ああ、祭事の仮装とか、そういうものかと考えたんだね」

「いや、今日は特に何もなかったと思うよ。」

「違ったね」

「じゃあ、みんなそういう身体的特徴なのか、そういう人種なのか。どちらにしても、凄いい」

「私も初めてエルフの人とか、ドワーフさんを見たときはそんなだったな。付き合ってくるかと慣れるよ。緊張は、するけどね。旅人さんはこれからどうするの？」

「買い物と、宿を探しながら街を見て回ろうと思います。」

「そうなんだ。宿だったら冒険者ギルドにあるから、見つからなかったら行くと良いよ」

「お姉さんは？」

「ギルドに配達かな。その後は決めてないけど」

「では、ここでお別れですね」

「名残惜しいけど仕方ないね。」

「うん、それじゃあ」

旅人達と牛飼娘は別れ、お互いに見えなくなった。

町は、これまでの進んだ文明の国と比べて随分と古めかしいデザインだった。

石畳に植物油のランプ。建築物はほとんどレンガと木材。インフラに電気は通っていないようで、水も水道では無く井戸から汲んでいた。

時折馬車が走り去る。荷台には、野菜やミルク缶等の食べ物や、剣や盾、鎧などで武装している人々が乗っていた。時折虚ろな目をしたローブの人々が通ることもあった。

「こういうのは失礼かもしれないけど、あまり文明は進んでいないかな」

「暖房とか、テレビも無いのかな」

「それくらいなら平気だよ」

「シャワーもないかもね。」

「それも別にいいさ。……まあ、ある方が嬉しいけどね、すごく」

「困ったね」

「ああ、困った。どうしようか」

旅人とモトラドは、ちよつとした広場のベンチで頭を抱えていた。つい先刻のことである。

積んでいた調味料や換金性の高いものを売って当座の資金を手に入れた旅人は、モトラドの燃料を探して錬金術師の元を訪れた。

しかし、錬金術師曰く。

ペトロレウムは量を集めることが難しい貴重な物である。

それを数リットルとなると、金も材料も時間もとてつもなくかかる。

そもそも、流浪の身である旅人に貴重な研究材料をおいそれと売るわけに行かない。

信用出来る証拠と金を持って出直してこい。

とのことだった。

「手持ちの物を換金しても足りないね」

「ああ、それに信用できるものときた。どうやって準備しよう」

そう言って旅人は氷菓子をなめた。

「何食べてるのさ」

「さつき買った、あいすくりんっていうらしい。甘くて冷たくて美味しい」

「はあ、さいで。無駄遣いしても知らないよ」

「どうせ燃料代には足りないし、このくらいなら平気だよ。……そういうえば冒険者って職業があるんだっけ」

「なるの？ 冒険者に。この町に腰を落ち着けちゃう？」

「燃料分稼ぐまでだよ。たまには長居するのもいい」

旅人はベンチから立ち上がり、半分残った皿代わりの焼き菓子と、少し残ったあいすくりんを口に放り込むと、モトラドを牽引して歩きだした。

冒険者ギルドにて

冒険者ギルド。

冒険者や冒険者希望者、依頼人が絶えず往来する場所である。常に人々で賑わっているが、それが春ならなおさらのことだ。冬眠から覚めた腹を空かせた魔物や害獣は活動し始めるし、冬眠で懐が痩せてしまった冒険者も少なくない。

心機一転、一攫千金を夢見てギルドの門を叩く新人も。

なので、とある春の日の昼下がりも、ギルドは大変に賑わっていた。

「はい、自分はその、西の村の出身です」

「ポーシヨン持ったか？ 剣はしっかり研いだか？ 久々だからって気イ抜くなよ！」

「魔狼が群れです。ええ、最近商隊を襲うようです」

その喧噪を、女神官は近く、冒険者ギルドの酒場のカウンター席から眺めていた。

そして獣人女給が、眺める女神官を眺めていた。

視線に気付き、「何か？」

パタパタと手を振って女給は料理を置いた。

「いや、この時間に一人って珍しいなって。はい、ビーフシチューと麦パン、檸檬水」

「ありがとうございます。ええとですね、昨日冒険から帰ったときに今日お休みって聞き逃していたみたいで。寝坊したと思って慌てて起きたら……。」

「ああ、休みなのに準備しちやったってわけね。」

赤面しながらシチューを食べる女神官に、ニヤニヤと笑みを見せる獣人女給。喧噪から離れた場所で、緩やかな空間が流れていた。

「他の人たちは？」

「装備を買い足したり、報酬を換金に行ったり、まだ寝てたり…」

「あの人って森人のお姫様じゃないの…？」

女神官が遅めの昼食を終え、少し獣人女給と駄弁っていたとき、

「何か騒がしいね」

獣人女給がそう言い、女神官も目線の先を見たところ、受付でトラブルが発生しているようだった。

岩のような筋肉の巨漢が、受付嬢にくっついてかかっている。モヒカン頭の額に鉢巻を、素肌にベルトを巻いて腰に幅広のブロードソードを佩いたその姿は剣闘士のようなだ。

受付嬢も努めて冷静さを保っている様だが、どこか焦りが見える。

「だから、どうしてこのオレが白磁からのスタートなんだ！」

「何度も申し上げているように、冒険者はみんな白磁級から始める規則となっています。どんなに村で名を上げた方でも、優遇することとは出来ません。きちんと依頼をこなして実績を上げてください」

「何でだよ！ どう考えたってそこのジャリよりもオレが強いのは見てわかんदार！ 村でゴブリンを追っ払ったなんてチャチなモンじゃ無いぞ、翡翠の冒険者五人をまとめたのしたこともあるんだ！」

「どんなにあなたが強くても、例外はありません。」

話は平行線……というよりも剣闘士が話を聞いていないだけのようである。

なるほど、十分に鍛えられた筋肉からその剣闘士の強さが伺える。この何度も聞かされた自慢話もあながちウソでは無いのだろう。

しかし、冒険者を表す等級は腕っ節があれば成り立つ職ではない。信用と人格、貢献度によって与えられるものだ。どこかの冒険者との喧嘩など実績になるわけが無く、それを盾に無茶な要求をする輩など信用できるはずも無し。こうして他の冒険者や依頼人、ギルドそのものに迷惑をかけるのならば貢献などあるはずも無く、ただの害悪であ

る。

つまり冒険者に全く向いてないのである。

しかし、その威圧感の本物で、モンスターと相対したことも無いようなルーキー達は及び腰。ほとんどが離れて知らんぷりしつつ様子を伺っている。依頼に来た人の中には、回れ右して出て行く者もいた。全く気にせず掲示板を物色する肝の据わった者もいるが…。

「あんなわかりやすいヤツ初めて見たよ。でも、ベテランの冒険者は今日はいないみたいだし、どうしようか……」

獣人女給が珍しくうろたえていると、女神官が立ち上がった。

「私が、注意してきます」

「ええ!? でも、危ないよ」

「それでも、冒険者ですから。他の方達の品位を疑われる様な行いは避けて、もらわないと」

緊張にすこし震える声で言うと、錫杖を持ってギルドのカウンターに向かった。

「あの!」

「ああ!?!」

剣闘士が凶悪な面貌で振り返ると、白い神官衣を纏った少女がいた。

「他の方へのご迷惑です。おとなしく規則に従うか、出て行きなさい。」

「なんだと……」

剣闘士のこめかみにはビキビキと血管が浮きでている。

「テムエのようなガキの、指図を受けなきやなんねえだと……」

並の冒険者ならそれだけで逃げだしそうなプレツシヤー。しかし、女神官は緊張しつつもおびえてはいなかった。オーガ、小鬼英雄、魔神の手、エトセトラ。これまで越えた修羅場に比べたら、ただの無頼漢など。

こちらが凄んでも、女神官はおびえた様子を見せなかった。

よほどプライドを傷つけられたのだろう、拳を岩の如く握りしめている。

もう一言言つて脅そうとして、剣闘士は見た。

女神官の首から下がっている認識票。青玉の認識票。年下の、ひよろい、女の、神官の、先輩。

そして、それが剣闘士の小さな器の限界だった。

「ツテムエ、舐めてんじゃねえええええッ!!」

「いと慈悲深き地母神よ——」

剣闘士は腰から抜剣し振りかぶった。

遠巻きから眺めていた誰かから悲鳴が上がり、そして

ドン。

轟音がして、ギルドは一瞬で静かになった。

音の出所は、先ほどまで掲示板を眺めていた、ベストの若者が持つ短筒だった。液体火薬特有の白い硝煙を上げている。

ブロードソードは真ん中で折れ、上半分はクルクルと回転して床に刺さった。短筒から撃つ放された弾丸が剣の腹に命中し、ブチ折ったのだ。

剣闘士は半ばで折れた剣を振りかぶったまま唾然としていた。

「もう、良いんじゃないですか？」

若者が言う。

我に返った剣闘士は射殺せそうな目で若者を黙って睨み付けた。若者は少しも動かずに短筒を突きつけている。

何秒経ったのか。剣闘士は折れたブロードソードを腰の鞆に戻すと、ゴツゴツと革サンダルをならしながらギルドの回転扉を蹴破って去って行った。

緊張が解かれ、空気が弛緩する。

ギルドには喧噪が戻り、いつものように騒がしくなった。

若者は短筒をしまうと、依頼書を一枚掲示板から剥がして受付に持って行くこうとする。

受付嬢はカウンターから出ると、若者に慇懃に頭を下げた。

「場を治めていただいて、ありがとうございます。表だってお礼は出来ないの……後で水菓一本オマケします。」

「ありがとうございます。いただきます。あの、この依頼はボクでも引き受けられますか？」

「こちらは…、ごめんなさい。人数で指名があるので、一人では受けられないですね」

「そうですか……。」

依頼書を掲示板に戻すと、「では」と会釈して受付嬢は持ち場に戻り、若者は掲示板の依頼書を確認し直した。若者は小さな声で、「灰色熊ならなんとか出来そうだったのに……」と言った。

女神官は若者に声を掛けた。

「あの、ありがとうございました」

「ボクも、困ってましたから」若者は言うのと、少し逡巡してから、

「あの、今どこかの一党に所属とかしていませんか？ 良ければ一緒に依頼を受けて欲しいのですが」

「わ、私は…、ええ、今は一党を組んでいました。」
女神官は失礼かとも思いつつ、若者を眺めた。

見たことの無い顔だ。今日冒険者登録したのだろう。しかしこの落ち着きは何だろう。新人にあるような興奮や緊張は感じられず、むしろ警戒を解いていないようにも見える。

女神官は、旅人に少し興味を覚えていた。

「差し出がましい事を言うようですか、最初は下水道の鼠退治がオススメですよ」

「受付の人にも言われました。でも、ボクは多めのお金が必要なので。」

その言葉をきいて、ますます興味が沸いた。

冒険者を目指す者の多くは、富や名声、そして冒険だ。美味しいものを食べようとしたり徳を積むための者もいる。中にはゴブリンに拘る者も。

しかし、ただ金銭のみに固執するのは珍しい。

女神官は若者からとんでもない事を聞いた。

「恥ずかしいことなのかもしれませんが、このトロール…とか、ワイバーンとか、ゴブリンというのがよくわからなくて。良ければ魔物について少し教えてくれませんか？ あと、この国の事も少し」

「ええ!？」女神官は素っ頓狂な声を上げた。

ワイバーンやトロールはともかく…ゴブリンも知らないとは！

女神官は酒場の方を指しながら

「じゃあ、せっかくですし座って話しますか…?？」

そう言っつて、女神官は先ほど昼食を済ませたばかりなのを思い出した。

酒場にて

二人は酒場の適当な席に掛けた。旅人が鴨肉のソテーと麦パン、野菜のスープを注文した。

「じゃあ、話そうと思うんですけど……」

女神官はおずおずといった様子で尋ねた。

「この、その……これはなんですか？」

そういつて指さしたのは、テーブルの傍らに置かれたモトラドだった。

「こいつはボクの相棒のモトラドです。乗って旅をしています」

モトラドがどうもね、と言い、女神官は驚いた。

「中に誰かいるのですか？ それとも使い魔か何か……？」

「中に誰もいませんよ。普通のモトラドです。燃料を入れて、中で燃やして走る二輪車です。」

「そうそう、中には、エンジンと燃料くらいしか無いよ」

「二輪車……。自転車みたいなものでしょうか」

そういえば、女商人が言っていた気がする。貴族の間で、坂道を降りるのがブームになっているのだとか。その発展した物かなと勝手に推測する。

「そんなことより、怪物について教えてくれない？ 見たこと無いんだ。」

モトラドが言った。

「見たことがないんですか……」

先ほども言っていたが、このご時世どころかこの世界で怪物について知らない、聞いたことが無いというのは、極めて珍しいことである。どんな子供も子守歌や本、あるいは実際に目にする事で怪物の怖さ、あるいは畏敬を知る物である。よっぽどの箱入りか、本当に魔物が存在しない地域から来たのか。

そこまで考えて女神官はブンブンと頭を振った。だから何だと言うのだ。困っているなら、助ければ良い。知らないのなら教えれば良いのだ。

「そ、そうですね」

「コホンとかわいらしい咳払いをすると、女神官は口を開いた。

「怪物とは、私たちを敵意を持って襲う生き物の事です。種類は文字通り五万といて、毎日私たちに被害を及ぼしています。冒険者の所にくる依頼のほとんどは怪物の被害への対処です。」

「普段からくるんですか。大変ですね。」

「死んじゃうかもしれないのに、怖くない?」

「いえ、これが仕事ですから」

「それじゃあ冒険者って、怪物を駆除する人って事?」

「それは少し違います。もちろん怪物や、祈らぬ者の退治を依頼される事もありますが、迷宮の探索や郵便も含まれます。まあ、冒険者を目指す人は武勇を立てたり、迷宮や神秘、伝説を探すと言うか、その……」

「冒険をしたいって事だね!」

モトラドが女神官の言葉を予測して言った。

「そうですね。皆さんそう言った夢を持って冒険者になることが多いです。」

「なるほど」

「じゃあ、旅人もある意味冒険者なのかもね」

「たしかに、いろんな国を見て回る事は楽しい……。うん、そうかもね」

「はい、ご注文の品お持ちしました!」

そこで、獣人女給がやってきて料理を載せたトレイをテーブルの上に置いた。

「旅人さん? さっきはありがとね! 腸詰めオマケしたから!」

みればソテーの横には三本の腸詰めが添えてあった。

「ありがとうございます。いただきます。これは何の肉ですか?」

「豚肉と牛肉! 近くの牧場のね。そだ、貴女にもお礼ね」

そう言つて獣人女給は焼きリンゴを置いた。

「でも、私は何も…」

「良いから良いから。それに、練習してて焦がしちゃったんだよね」

タハハと笑う獣人女給に苦笑を返す女神官。

しかし一口食べるとバターの塩気とリンゴの甘みが合っていて美味しかった。

旅人と女神官はそれぞれ並べられた料理を食べ、旅人は追加で焼きリンゴを注文した。

食後の紅茶を飲みながら女神官は、

「旅人は、さっきお金が必要と言ってましたが、何故ですか？」

「じつはモトラドを動かすには燃料が必要なんです。でもこの国では貴重らしくて。」

「燃料…。ペトロレウムですか？」

「錬金術師の方はそう言っていました」

「なるほど……。」

これで合点がいった。旅人は、旅に出発するのにお金が必要なのだ。

先の掲示板で難易度のそこそこ高い依頼を受けようとしていたのも理解できた。

新人向けの鼠退治の収入では、冒険への経費を除けばその日乗り切る程度しか手に入らない。

「でも、報酬の多い依頼は白磁級では受けられない……。」

「それで、どうしようか悩んでまして」

「やっぱり、ゴブリンってヤツの依頼を受けるしかないんじゃないか？ 受けられる依頼の中で一番報酬高かったし。」

モトラドが言った。そうかもねと旅人が返す。

「ゴブリンか？」

と。そこで後ろから声を掛けられた。

旅人が振り返ると、彼が立っていた。

安っぽい鉄兜。薄汚れた革鎧と、その下に着込んだ鎖帷子。中途

半端な長さの長剣を腰に帯び、左手には括られた丸い小振りの円盾。

胸元に下がった認識票は銀。

女神官が嬉しそうに声を上げた。

「ゴブリンスレイヤーさん！」

「なんだ。」

ゴブリンスレイヤーと呼ばれた男は、無愛想に返事をした。

ゴブリンスレイヤーという男

「ゴブリンスレイヤー、さん？」

「そう呼ばれている。」

旅人が聞き、ゴブリンスレイヤーが答えた。

「どうかしたか」

「いえ、前に知り合った人と声が似ていたので」

「そうか」

「かみきり丸よ、つつ立つとらんで席に着け」

後ろから声を掛け、ため息をつきながら肩をトントンと叩くのは、長い白髭が特徴的な鉱人道士だ。

「あの商人、中々手強くて参ったわい。絶妙な条件ばかりだしおつて」

「いい話ばかり振る口が達者なだけの物売りよりはマシですな。対等に損得のやりとりが出来てこそ一流と言うもの。」

満足げにうなずくのは蜥蜴僧侶である。目玉をギョロリと動かし、旅人と目が合った。

「おや、見慣れないお方がいらっしやる。神宮殿のお知り合いですかな？」

「初めまして。ボクは通りすがりの旅人です。こっちは相棒のモトラド。乗って旅をしています。」

「よろしくー」

「旅人は珍しくねえが……一人旅するにしちゃ若いのう。それになんじやこの鉄の塊は。乗り物か？ どういう仕組みで喋るんだ？」

「それにしても車輪が二つだけ。倒れてしまいそうなものだが。使い魔の類いやもしれぬ」

「それは、どちらかに倒れそうになったとき、タイヤを傾けると反対側に……」

鉱人道士と蜥蜴僧侶はためすすがめつモトラドを観察しながら口々に言い、モトラドがそれに答える。

「それで」

円卓を囲む椅子の一つに座ったゴブリンスレイヤーが、不躰に言った。

「ゴブリンと言っていたが。」

「ボクはゴブリン退治の依頼を受けようと思うんですけど、ゴブリンについて知らないんです。よろしければどのような生物か教えてもらっても良いですか?」

「ゴブリンはゴブリンだ。」

さも当然の様に言う。

旅人は困惑した様子を見せ、女神官は苦笑いを浮かべた。

「実は、旅人さんは怪物を見たことが無いらしくて」

「…………ふむ」

今度はゴブリンスレイヤーが困る番らしい。

鉄兜の顎に手をやり、考える仕草をとった。

話せることが多すぎて、何から言えば良いのか迷っているのだろう。

「子供ほどの体躯と知性、大きな耳、緑色の肌……だ。」

全部上げたらキリがないから、だいたい厳選したんだなあ。女神官は外見のみで説明したゴブリンスレイヤーに少し感動していた。

「もしかして、何か道具とか使いますか?」

「使う。上位個体も存在する」

「それじゃあ、森で会ったあの緑の猿もゴブリンだったのかもね」

二人に質問攻めに遭っていたモトラドが、割り込んで言った。

「ゴブリンにあったのか。」

「はい。ボク達はいつの間にか森にいて、そのときに三匹ほど襲いかかってきました。」

「全部撃ち殺しちゃったけどね」

「場所は」

「ここから、牧場の方に行って更にずっと先です。」

ガタリと立ち上がると、受付の方にズカズカと歩いて行った。

旅人は、女神官に尋ねた。

「ボクは何か怒らせるような事をいつてしまったのでしょうか」

「そんなことは無いですよ。ただ……」

「気にすんない、旅の。アイツは小鬼を殺さずにいられぬのだ。」

「彼は小鬼を殺す者でありますからな」

鉦人道士と蜥蜴僧侶は話が終わったのか、旅人達の話に合流して言った。

その質問に答えが出る前にゴブリンスレイヤーが戻ってきた。

「ゴブリンだ。やはり商人を森で襲うゴブリンが出ているらしい。俺は行く。」

それだけ言うゴブリンスレイヤーに、女神官は小さく笑みをこぼした。

本当に口下手ですね。

女神官は神官帽を被ると、「私も行きます」

「ま、いつものことだから」鉦人道士は触媒の入った鞆を確かめてから立ち上がった。

「鱗のはどうする」

「徳を積めるのであれば、否応も無し、と」

「すまん。助かる」

ゴブリンスレイヤーは小さく頭を下げた。

あの、と旅人が言った。

「ボクも同行して良いですか？ これからしばらく狩ることになりそうなので、知っておきたいです」

「安全を保証は出来んが」

「大丈夫です」

「獲物は」

「ハンド・パースエイダーが二丁と、自動連射式ライフル・パースエイダーが一丁です」

「パースエイダー」

「火薬で鉛の弾を撃つ道具です」

「短筒か」

「そう呼んでいる国もありました」

「そうか」

ゴブリンスレイヤーは蜥蜴僧侶を見遣った。

「どうだ」

「落ち着いた物腰は、経験によるものでしょうな。この若きで一人旅は、生半可な腕では出来ぬもの。術士殿は如何か」

「鱗のに全部言われちゃったわい。まあ、どんだけ考えるよりかは実際に見た方が早いのが。すわ短筒に関しちゃ訓練が必要だし、それで旅が出きんなら足を引つ張るってこともなかる」

「決まりだな」ゴブリンスレイヤーは旅人に向き直り、

「問題ない」

「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

旅人は丁寧^{テイネイ}に礼をした。

「耳長も嫌とは言わんだろ。てーか、耳長の姿が見えんが。」

「多分、まだ寝ているかと」

「つたくあの金床は……」

噂をすれば。

ギルドの二階から欠伸をしながら降りてくる森人の姿があった。手すりに腰掛けると、滑り台よろしく滑り降りてくる。常人が行えばしまりの悪いそれも、上森人がやれば典雅な仕草に見えるものだ。

ゴブリンスレイヤー一党の野伏^{レンジャー}、妖精弓手である。

妖精弓手はこちらを見つけると、

「今日ってお休みじゃなかったっけ。何か行くの？」

「ゴ布林だ。」

「……」

ゴブリンスレイヤーの不意打ち^{アンブッシュ}に妖精弓手は絶句してしまった。

幾ばくかの葛藤を乗り越え、

「場所は？」

「ここから牧場を通り過ぎてもつと行った先の森だ。」

「……冒険一回ね！ 弓持ってくる！」

階段を一段飛ばしで上り、部屋に戻っていった。

村を襲ったゴブリンをスレイするお話

その村は、あえて言うなら運が悪かった。

ほんの少し前に開拓者が森を少しばかり切り開いた村だった。集落と言っても良いかもしれない。

街道に続く道の側、切り開かれたその村は森の中を通る商隊からは重宝された。

木を切って手に入れた薪、獣を狩って剥いだ獣皮、その森に多く生える薬草、エトセトラ。

森の恵みを受けてその村は順調に成長しつつあった。

成長したからか、偶々目についたからか。

その村は、ゴブリンに襲われて、滅びた。

だからまあ、その村はあえて言うなら運が悪かったのだ。

そのゴブリンは、つまらないな、と思っていた。数日前にこの村を襲い、人間どもを皆殺しにしたときはスカツとした。一人につき人間を一匹割り当てられたのも最高だった。

腹一杯喰ってもまだ半分。なんなら村の糧秣もあるのだ。こんなに良い住処はない。

しかし今はどうだ。すでに村の食料は漁り終え、貰った鉋人の男も食い終わり、残りは口にくわえている指が一本。

気に入らなかつた。

直ぐそこでは残った只人の娘の死体に肉棒を突っ込んで遊んでい
るヤツがいる。

自分はもう使い切ってしまったと言うのに、ヤツときたら！

さつき来た商人がマヌケにも落としていった荷物も頭目に持って行かれてしまった。ガタイが良いだけの馬鹿はこれだからいけない。豊かな資源は優秀な俺にこそ与えるべきだ。

そういえばもつと人間を喰いたくて出て行ったヤツがいたな。

馬鹿だと思っていたが、それも有りかもしれない。

そう思って村の入り口を見ると、門番を押しつけていた一人が血を

流して倒れていた。

アイツは碌に見張りも出来ないのか。

門番の持っていた槍が欲しくて立ち上がった時である。

唐突に、近くにいたヤツの頭部が消えた。

いや、爆ぜたと言うべきか。

肉と血が弾ける音と共に頭を失ったそいつは、娘の死体から手を離し、ぐったりと倒れた。

倒れる様が滑稽で、ゴブリンは笑った。

自分の頭部も吹き飛んだ事に、最期まで気付かなかった。

「距離503、気温22、湿度49 西から風速4メートル」

「ありがとう。これで三匹」

木の側に膝立ちで構えた旅人は、傍らのモトラドにお礼を言うところ、コープに新たな標的を納めた。少し上を狙い、発砲。抑制された発砲音と共に弾丸は飛び出した。眠っていたゴブリンは、そのまま起きることは無くなった。

「ナイスショットー」

「こんな小さな礫が良く当たるものね」

モトラドが気の抜けた歓声を上げ、妖精弓手は皮肉抜きで感服した様子で言った。

弓を主に使う森人としては、火薬を使う遠距離武器が珍しいのだから。

「短筒は一度の装填で一発しか撃てないが威力は弓の何倍も高い、と聞いたのだが。さつきからバスバス撃ってるのう」

髭をしごきながらしげしげと眺めて言った。

「それは多分フリントロック式です。ボクのフルート……このライフ・パースエイダーは弾倉を取り替えて装填するので、そのまま9発撃てます」

「なるほど。クロスボウのカートリッジのようなものか」

旅人がフルートの弾倉を取り替える作業を眺め、ゴブリンスレイ

ヤーは感心して言った。

「弓より高火力で射程もある。耳長の十八番も顔負けだの」

「まあ、ストーンブラスト弾も投石も弓より届かないくせによく言うわ！」

鉦人道士がからかうようにいい、妖精弓手がくつてかかる。喧々囂々と言った様である。

現在妖精弓手が弓を引かないのは、村までかなりの距離があることと、木々が覆って曲射で当たらないのが理由なのだが。

「見てなさい！」

妖精弓手は上の森人しか知らない言葉を口ずさんだ。

するとどうしたとか。空を覆う木々が穴を開けるように動いたではないか。

その穴めがけて矢を放てば、山なりに飛んだ木芽鏃の矢は切り開かれた村まで届き、旅人が狙っていたゴブリンの頭頂にぶっささった。

妖精弓手の得意げな顔に鉦人道士はわかったわかったと言わんばかりに手を振った。蜥蜴僧侶と女神官が目を合わせて肩をすくめる。

「ええ……今何が起きたんですか？」

「うそー」

驚きを隠せないのは旅人とモトラドだ。木々がお願いを聞いて動くなど……

「森人は森と共に生きる種族だからね」

「はい？」

「それって理由になるの？」

「なりますとも」

なるらしい。さも当然と言いつつ妖精弓手に、旅人とモトラドはそれ以上追求しなかった。

旅人と妖精弓手の狙撃によってゴブリンの数はみるみる減っていった。

気づけば、表に出ていたゴ布林20匹弱は全て物言わぬ屍と化し

ている。それぞれの死体から流れた血は地面に染み込み、赤黒く染めた。

「矢と弾はどうだ」

「まだ余裕があります」

「木に頼めば補充できるわ」

「そうか」

「起こして出てきたところをまた狙撃しますか？」

旅人が言った。

「いや、パニックになって逃げ出されたら面倒だ。」

ゴブリンスレイヤーは少し思案して、

「俺たちで突っ込む。家を一軒ずつ回り、中にいたら殺していく。一斉に起きたら〈ホーリーライト聖光〉だ」

「承知、承知」

「は、はい！」

蜥蜴僧侶が印を結び、女神官が震える手で錫杖を握りしめて言った。

「護衛してやれ。」

「おうよ。任せな」

「よろしく願います」

鉱人道士が酒瓶をグビりと煽って答えた。

「お前達はここに残れ。援護と後備だ。」

妖精弓手と旅人に言った。

「わかりました」

「なんか地味ね」

「お前さんは突っ込んでも格闘できんじやろ」

鉦人道士と妖精弓手がにらみ合う。
ゴブリンスレイヤーは抜剣した。

「行くぞ。残りのゴブリンを皆殺しにする」

「へいと慈悲深き地母神よ、我らに遍くを受け入れられる、静謐をお与えください」……！」

地母神によって与えられた奇跡によって、二人の足音はおろか、木々のざわめきさえも消え去った。

音の消えた村でゴブリンスレイヤーと蜥蜴僧侶が搜索を始めた。

近くの家の前に立つと、目配せをして、ゆっくりと扉を開ける。

いた。荒らされた部屋の中、近くに武器や何かの肉を並べて眠るゴブリンが三匹。

ゴブリンスレイヤーは慣れた手つきで手槍を拾い、首に突き刺して殺していった。

蜥蜴僧侶はその間に家の奥まで確認し、生存者やゴブリンの子供を探していく。

家を出ると、扉の隅に白墨チョークで小さく印をつけた。

二軒目、無し。三軒目、ゴブリン2。四軒目、ゴブリンの子供が8匹……

生存者は確認できなかった。

確認する民家は後一つ。

二人が向かおうとしたところで、木々の風に揺れる音や鳥のさえずりが聞こえ始めた。

〈沈黙サイレンス〉の奇跡の効果が切れたのだ。あと一つ。ここは温存した方が良いだろう。ハンドサインを送る。

二人が民家に向かおうとしたとき、その家の扉が勝手に開いた。そして出てくる大きな影が一つ、小さい影が一つ。

田舎者ではない。ゴブリンにしては鍛えられた肉体。数多の傷は多くの冒険者から生き延びた証か。

そして伴うように出てきたゴブリンは指で出来た首飾りと、骨で組まれた杖を持っていた。

「小鬼英雄が1、小鬼呪術師が1。やるぞ」

「お任せあれ」

ゴブリンスレイヤーが鉈を、蜥蜴僧侶が竜牙刀を構える。

そこで、2匹のゴブリンに木芽鏃の矢とライフル弾が襲いかかった。

どちらも必中、急所を狙えば必殺のそれであるが、そこで不可思議なことが起きた。

一矢一弾はゴブリンどもに命中する前に急に向きを変え、ライフル弾は地面に、矢は近くの家の壁に刺さったのだ。

信じられないのは旅人とモトラドだ。

「弾が……急に曲がった？ 風が吹いている訳じゃ無いのに。見た？」

「見たよ。地面に向かって曲がらなければ頭に当たって、大きいヤツは殺せてたよ。」

「へ矢 避〜ね。私たちじゃどうにも出来ないわ」

「あの小鬼呪術師の仕業だな。あれを止めなくては支援を受けられない。」

ゴブリンスレイヤーは、小鬼呪術師に狙いを定めて鉈を投げつけた。

縦に回転しながら飛ぶ鉈は、矢でも弾でもない。へ矢避〜の対象にならないはずだ。

しかし

「GGBOOOOOOO!!」

小鬼英雄が斧を振るい、鉈をたたき落とした。

小鬼英雄はニヤニヤと醜悪な笑みを浮かべて斧を軽く振っている。小鬼呪術師もこちらを指さしてゲタゲタ笑っている。

弓やライフルは小鬼呪術師が、投剣や投石は小鬼英雄が落とすと言うわけだ。

なるほど、これでは近づいて戦うしか無い。それには怪力である小

を投げつけた。喉に刺さり、自身の血で溺れる小鬼呪術師の首を、もう一度捻って絶命させる。
ゴブリンは、全滅した。

やっぱりこの世の者じゃ無かったお話

「おーい、こっちにエール四杯！ キンキンに冷えたヤツね！」

「うーん、今日の報酬じゃあんまり頼めないな……。スープと、麦パンください」

「はい、たった今シュリンプ揚げりました！ 食べたい人ー?!」

「すみませーん、豚肉包み、茹で五、焼き五、ニンニク多めで！」

冒険の後は、飯に限る。

命をかけて冒険して、その後にさっさと帰って眠るなど、それほどつまらぬ事があるものか。

冒険者ギルドの酒場では、毎晩多くの冒険者が集って宴を開く。

無事で良かった。あの呪文は良いタイミングだった。罫を見逃したな。お前だって。

帰ってこれた事を祝ったり、反省会をしたり、一党によつては様々だ。

新人から熟練者まで、多様な冒険者が思い思いに料理を注文し、あつる者は豪快に、またある者は上品な所作で各々の料理を食してゆく。

ゴブリンスレイヤーの一党もまた、冒険を終えて新入りと共に隅の席に着いていた。

「それでは、怪物の首と、村の復興と、無事の生還に！」

乾杯。妖精弓手の音頭に合わせ、ガツガツと杯がぶつかった。

「済みませぬが、腸詰めにはチーズを入れた物を頼みたいのだが。」

「はい、いつものね！ 旅人さんはどうする？」

「では、ボクも同じ物を。あと、麦パンとバターも」

「はいはい、腸詰め二皿麦パンバター……。モトラドさんはど

うします。う。」

「ごめんねー、燃料以外は食べられないよ」

「それは失礼を。ただいまお持ちしますねー！」

パタパタと尻尾を振りながら獣人女給が去ってゆく。

「今回はドワーフの出番全然無かったわねー」

「へっ、術が温存できて困ることなんざ無いわい。そんなこともわからんのか、金床」

「なにおう！」

「オルクボルグもなんか言ってやってよ」

「術が残るのは悪いことではないだろう」

「そこは私の援護しなさいよ！」

「蜥蜴の人は凄かったよねー。心臓を引っこ抜いちやってさ」

「ふはは、前にやったときは二度も首を逃してますからな。つい昂ぶってしまった。」

賑やかにみんなの箸が進む中、旅人が女神官に向きなあった。

「あの、今良いですか？」

「ふえ、……んっ、何でしょう？」

鮭のムニエルをコクンと嚙下した女神官は口元を少し拭って答えた。

「今日のゴブリン退治の時、あなたのその杖の先端が光ったのと、ライフ弾と矢が当たらなかったことなんですけど、アレって珍しくないんですか？」

「私の錫杖が光ったのは、奇跡によるもので、矢が曲がったのは〈矢避〉の魔術によるものですね。……ええと、もしかして」

「ええ、その、奇跡も魔術も、これまで見たことありませんでした。そういうことが出来るという人も、聞いたことはありません」

「何、何の話？」

割り込んできたのは、妖精弓手だった。

杯にはまだ薄めた葡萄酒が半分ほど入っている。ちびちび飲むからか、全然減っていない。

「旅人さんは魔術と奇跡を見たことがないらしくて」

「え、見たことがないの？」

それには鉱人道士も驚いた様で、目を見開いていた。蜥蜴僧侶はもう一皿腸詰めかけチーズを注文し、ゴブリンスレイヤーは鉄兜でよくわからなかった。

胡乱げな目で、旅人に顔を近づける妖精弓手。

「どこかに引きこもってたとか？ でも耳長くないし、鉱人みたいにピア樽でもないし、肉球もないし、鱗もないし。変わってるわねー……」

蜥蜴僧侶はジョッキの牛乳を飲み干して言った。

「モトラド殿の奇怪さやパースエイダーという武器も含めて考えるに、旅人殿は来訪者トラベラーの類いなのもしれませんな」

「来訪者？」

「理の外にいる者、四方世界の外にいる者。拙僧も聞いた話でしか無いのだが。術士殿はいかがか。」

「儂だつてそんなに知らんわい。四方世界の外は神々の遊戯場なんていわれとるが、そもそも行って、見て、帰ってきたヤツがおらんのだから。渦の中や銀の幕、扉の向こうから来ると言われとるが……心当たりあるか？」

「そういえば、凄いい吹雪にあつたよね」

「ずっと晴れてたのに、急に天気が変わって。しばらくしたらさっきの森の中にいました。その、外の世界というのが本当なら、ボク達はそのときにここに来たのかもしれない。」

「それがホントならさー！」

妖精弓手がパンと手を叩いて言った。

「これまで旅した国って、私たちも知らないような凄い国ばかりってことじゃない!？」

半ば興奮気味に言う妖精弓手の目はキラキラと輝いている。まるで冒険譚を聞く子供のようなようだ。

「確かにそれなら興味あるのう。」

鉦人道士ががぶりと酒を呷り、「聞かせちゃくれんか？」

頷く蜥蜴僧侶に、そわそわと好奇心を隠せずにチラチラと旅人の顔を伺う女神官。

「オルクボルグも！ 興味ない？」

「俺は、」

少し言い淀んで、「何か、聞かせてくれないか」

「だってさ、どうする？」

「じゃあ、ボクが訪れた国の話をいくつか」

そういつて旅人は話し始めた。

「お疲れ」

「ああ、疲れたよ。凄く掘り下げて聞いてくるんだもの」

ギルドの二階に部屋を取った旅人は、机の上でパースエイダーの整備をしていた。

「でもさ、国の事よりも、どっちかというに進んだ技術の方が驚かれる事が多かったね」

「まあ、みんな楽しんでくれた様だし、良かった。料理も美味しかったしね」

カノンの弾倉をはずし、弾を抜いてブラシで埃を払っていく。

「あの蜥蜴の人が言っていたことは本当なのかな。」

「どの事？」

旅人が言い、モトラドが返した。

予備の弾倉も手入れを終えて、ポーチに戻す。

森の人の弾倉から弾を抜き、予備の弾倉に弾を込め直していく。スプリングが痛むのを防ぐためだ。

「別の世界から来たってやつ。確かにここの人たちは体の一部が動物っぽかったり、背が高かったり低かったりするけど、これまで見た国と比べると、居るんじゃないかって思うよ。十分珍しいけど」

「魔術や奇跡は？」

「奇跡が神様にもたらされたもので、魔術が自分でこの世の理を書き換えるってやつ？」

「それは、結構異世界の証明になるんじゃない？」

「……高度な科学？」

「確かに一理あるけど」

「あるけど？」

旅人は弾を込め終わると弾倉を森の人に差し込み、ホルスターに戻した。

「外を見れば直ぐにわかると思うよ。窓開けて、空を見てご覧」

「空？」

旅人が窓を開けた。

「見える？」

「……見える。けど、まあ、これはなんとも……」

窓の外。満天の星空。そして、

「月が二つあるとはね……」

空には、いつも野宿の際に見るようなオレンジのような黄色の月

ともう一つ、翡翠に輝く緑の月が浮かんでいた。

翌日からは、ほとんど毎日依頼を受けた。

ゴブリン退治だけでなく、遺跡の調査や商隊の護衛。鼠退治（大きな鼠見たさ）にも行った。

必要な燃料の代金には、まだ足りない。

旅人がこの街に来て十日ほど経った頃、
とある男性剣士が冒険者ギルドの戸を開けた。

良く磨かれた軍靴、シャツには糊がついており、佇まいには隙を感じさせない。

腰に佩いたサーベルには精緻な意匠が施されており、一級品であることが伺える。

そして腕の腕章には国の紋章。王都のものだろう。

剣士は、きつちり依頼人の列に並び、順番が来ると、受付嬢に言った。

「失礼。この街のギルドには、ゴブリン退治の専門家がいると聞いたのだが。」

「ええ、ゴブリンスレイヤーさんなら直ぐそこに」

剣士が振り向くと、ワンダリングアーマーさまよう鎧じみた戦士の男がそこに立っていた。

「俺がどうかしたか」

「……聞くが、貴方がゴブリンスレイヤーか」

「そう呼ばれている。」

剣士はポーカーフフェイスを努めていたが、目を見開いたのは受付嬢

にもわかった。

まあ、驚きますよねえ。

銀等級なのに、新人でも着ないような薄汚れた装備をしているのだ。

等級と見た目を気にする都市の冒険者からすれば怪しくも見えるのだろう。

頭からつま先まで一瞥すると、剣士はしばし瞑目して、言った。

「貴方に依頼がある。ゴブリン退治の専門家である、貴方なのだ。話を聞い」

「場所はどこだ。直ぐに出る。」

新たな依頼を受けるお話

「石の町を知っているか。」

ゴブリンスレイヤーと剣士は応接室にて、向き合って座っていた。

この応接室は、過去に使ったことがある。

今の一党と初めて会ったとき。剣の乙女が直接依頼に来たとき。装飾品も、何も変わっていない。飾られた怪物どもの角や牙も、良く磨かれた黒檀の机も。

「知らん」

長椅子に腰掛けたゴブリンスレイヤーは、先の質問をバツサリと切り捨てた。

石の街。頭の中で反芻しても、何も思いつかない。石。鉱人道士なら何か知っているだろうか。

長椅子に座って剣を立てかけた剣士は、特に気分を害した様子もなく、続けた。

「建物が全て石造りの街だ。この街から北東に二日ほど行った先にある。」

「ふむ」

「その街が、滅びた」

「……そうか」

良くあることだ。昨今では怪物を率いた黒き王も、無限に命を喰らう吸血鬼も、欠片も残さず破壊をばらまく暗黒の戦士もいる。

良くあることではあるが……だが慣れると言うことでは無い。

「報告をしたのはその街の冒険を終えて帰ってきた冒険者だ。彼らが言うには、その街は少し霧がかかっていて、人々が血を吐いて倒れていたらしい。遠眼鏡越しなので明瞭にはわからなかったようだが。」

「ゴブリンは関係あるのか」

「その死体に群がっていたのがゴブリンだと言うんだ。」

「なるほど」

「ゴブリン退治の専門家の貴方に尋ねたい。ゴブリンが街を滅ぼすことが可能か？」

「不可能だ」

ゴブリンスレイヤーは言い放った。

ゴブリンとは最弱の種族だ。如何に上位個体と言っても、所詮ゴブリン。村の一つは滅ぼせても、多くの冒険者がいる街を滅ぼすことは不可能である。

だが、しかし。

「いや、万が一……億が一、可能かもしれん。ゴブリンが、というよりも悪魔だのがゴブリンを使役している可能性の方が高い。」

「そうか……」

剣士は、少し顎に手を当てて思案にふけた。

そして

「今回依頼したいのは、石の街の現在の実態の調査だ。石の街が滅んだ首魁は誰なのか、確認してきて欲しい。可能であれば討伐。引き受けてくれるだろうか。」

ゴブリンならば殺す。違えば一度退く。わかりやすい。

「引き受け……」

そこまで言っただけ口をつぐんだ。

今の自分は、一人ではない。であれば、

「仲間と相談する。少し待て」

「だそうだ」

「今回の依頼で一番褒めたいのは、オルクボルグが行くかどうか

だけじゃなくて報酬の相談もしてくれたってことね」

冒険者ギルドの酒場、いつもの席にゴ布林スレイヤーの一派は集まっていた。旅人とモトラドも一緒だ。

「いつもは相談しないんですか？」

「小鬼殺し殿は、小鬼退治ならどんな依頼でも引き受けますからな」

「それは……凄いですね。ボクはとても出来ません」

「がめついもんね」

旅人がモトラドのエンジンタンクを叩いた。

「イテ」

「それで、どのくらいだとおっしゃっているのですか？」

女神官が尋ねると、ゴ布林スレイヤーは一枚の紙を取り出した。

「前金に金貨一袋。道具などの経費は別。調査を終えたら金貨一袋。首魁の討伐で金貨を追加だそうだ。」

「一人頭ですか？」

「そのようだ」

破格の値段である。しかし、街一つ滅ぼした祈らぬ者の討伐も含めれば妥当か。

「どうする」

「ええ、どうしよっかな」

ニマニマとニヤつくのは妖精弓手だ。目を細め、試すようにゴ布林スレイヤーを見る。

「へっ、耳長なんてかみきり丸が依頼の話をしに行ったなんて聞いたら、装備固めてそわそわ待つとったくらいなものな。」

「あつ、アンタそんなこと……」

「ハツハツハ、矢筒に補給して、弓の弦も張り直しておいて言い逃れは出来ませんな。拙僧も牙の手入れは十分ですぞ」

笑いながら言ったのは蜥蜴僧侶だ。本人としては微笑んだつもりだが、人相も相まって極めて獰猛である。

「儂も行くとするか。人の手で作られた石の街は、一度は見てもきたいしの」鉾人道士が残った酒を一気に飲み干した。

「私も行きます！」神官帽を抱えて女神官が言った。「放っておけませんから」

「すまん、助かる。後、お前達はどうする」

「行きます！」

「行っちゃえ！」

元々お金を稼ぐために始めた冒険家業、報酬が莫大ならば断るはずも無し。

旅人は即答し、モトラドも合わせた。

「では、決まりだな」

かくして六人と一台の一党は、石の街へ向かうこととなった。

風が吹き、緑葉の水面がザワリと揺れる。

草原を、二台の自動車が走っていた。一台は四輪駆動のトラック、旅の商人がよく使うタイプで、荒れた道ならある程度は踏破することが出来る物だ。その代わりに燃費が良くないので、荷台には大きなタンクが取り付けられていた。

その前方を走るもう一台は、装甲車だった。グレーの角ばったボディの上に口径7、62mmのガトリング銃が据え付けられている。

「なあ。しばらく獲物が見つからねえけど、どうする？」

トラックを運転するバンダナを巻いた20代頃の男が言った。野戦服の様な格好をしていて、腰のホルスターにはハンド・パースエイダーが、ポーチには予備の弾倉が納めてある。背後の仮眠スペースには、自動連射型パースエイダーがヒモで括つてあつた。助手席に座る顎髭の、同い年くらいの男は、髭をいじりながら唸つた。彼も、似たような格好をしている。

「そうだなあ、ここ2日は旅人も商人も見かけないなあ」

彼らは、強盗団だつた。あちこちの国と国の間に潜んでは通る旅人や商人を襲つて財産を奪つているのである。だが、彼らは謎の吹雪を抜けて以来、誰も襲えていない。強盗で生計を立てる彼らにとって、それは判断が必要になる場面であつた。

すなわち、今日は一時的に作るアジトに帰るか、もう少し搜索を続けてみるか。

奪つた宝石や装飾品、調度品はあるが、食料や燃料は別だ。腹が減つて戦えなくてはダメだし、燃料が切れて立ち往生などもつてのほかだ。万全で無くては奪うことは出来ないのだ。

バンダナの男はトランシーバーを掴み、スイッチを入れた。

「こちら二号車。今日の搜索はどうする。一度退くか。」

ザザ、とノイズが走り、「こちら一号車」と、装甲車の通信手から返事が入つてきた。

「それなんだが、根城に戻るための目印が見当たらない。」
「何?。」

周囲を見回して見ると、確かにいつもと違う気がする。

そろそろ、アジトのある森が見えても良いはずなのだが。

「あ、今前方に国が見えた」

一号車から情報が来た。

「かなり小さいし城壁も高くないが、国があるぞ」

「なら、とりあえずあの国で休まないか。いつもみたいに商人だつて

言ってる」

「ちよつと待て」

それから少しして、

「それで決まりだ。あの国に入る。怪しまれそうな物は隠しておけ」

通信終了と言ってトランシーバーは黙り込んだ。

「だだよ」

「久々に休めるな。シャワーでも浴びてサツパリしてえ」

「じゃあ、髭も剃ったらどうだ。なんかきたねえよ」

「これは俺のチャームポイントよ。」

そう言って二人は笑った。

無駄話をしている内に、国はどんどん近づいてきた。

「なんか国っぽくねえな」

「たしかに、少し小さい気がする」

だが、装甲車は特に止まることも無く進んでいく。

幌つきトラックも、その後ろについて行った。

そして、速度を落としたまま国に入っていく。

普通なら入国審査があるはずなのだが、その国は来る物拒まずと言わんばかりに道が空いていた。

門すらない

町並みを見て、バンダナの男が言った。

「すげえ、全部石造りだぜ」

「しかも継ぎ目が見えない。どんな作り方なんだろうな」

髭の男が鼻を嚙って言った。

「きたねえな」

「悪い、鼻水が……あ？」

髭の男が、鼻を擦った指を見ると、真っ赤に塗れていた。

それだけでは無い。口元に感覚がして手の甲で拭ってみると、それも赤くなつた。

「なあ、血が止まらねえ。何だこれ」

髭の男が運転手の方を見ると、彼の血の涙を流す見開いた目と視線が合った。

口からよだれと血の混ざった液体をだらしなくこぼしながら、ピクリとも動かない。

「お前っ……！」

反射的にハンドブレーキを入れたが、トラックは直ぐには止まらない。前方で停止している装甲車にぶつかからぬようハンドルを適当に切り、右に曲がって石づくりの民家にぶつかつた。

衝撃を感知したエアクッションが飛び出し、バンダナの男と髭の男が怪我をしないように受け止める。

バンダナの男と髭の男は死んだ。目や口から流れる血は、アイボリーのエアクッションをピンクに染めた。

幌付きトラックの前で停止した装甲車、ドアの隙間からは、赤い液体がポタポタとこぼれていた。

襲撃

早朝に辺境の街を出て、半日が過ぎた。

太陽はすでにてっぺんを越え、燦然と大地を照らしている。

穏やかな春の陽気は眠気を呼ぶ物だ。馬車の天蓋に座る妖精弓手はふわ、と欠伸を一つこぼした。

朝早起きだったことと、ゴトゴトと揺れる馬車も相まって、眠いことこの上ない。その上、

「暇ね」

半日進んで何も起きないのだ。最低限の注意力を残して妖精弓手はくつろいでいた。この後のミッションを考えれば、英気を養うのも大切な事である。

御者である蜥蜴僧侶はグルリと目を回して妖精弓手の様子を見て、クスリと笑った。

馬車の中では、

「こんないいお天気なのに走らないなんて、バチがあたるよ」

縄でくくりつけられたモトラドが不満げに言った。

鉦人道士がリングゴの最後の種までかみ砕いて飲み込むと、言った。

「やっぱりモトラドの本懐は走ることってか」

「そりゃね。剣は斬るため、槍は突くため、パースエイダーは撃つため。モトラドも走らなきゃ」

「燃料が高いんだから仕方ないよ。我慢して。」

「でもさあ、走れる状態なのに馬車に乗っけて貰うのってモトラドとしてのプライドが傷つけられるんだよ？ わかる？」

「わかんないよ」

旅人とモトラドが気の抜けた会話をし、女神官と鉦人道士が笑う。

ゆっくりと時が流れていた。

だが、今回は冒険なのだ。

ずっと安全に目的地に着くなど、あるはずも無かった。

「ん？」

最初に異変に気づいたのは、馬車の上の妖精弓手だった。

長い耳をピクリと動かして、音の方向、馬車の走る正面を見る。

「何か来るわ」

鋭く言った。すでに彼女の手にはイチジクの大弓が握られている。

ゴブリンスレイヤーが剣を抜き、旅人がカノンをドロウ。鉦人道士が触媒の詰まった鞆に手をあて、女神官が錫杖を握る。

バサリバサリと翼を羽ばたかせる音が聞こえてきて、ついに一党が姿を確認出来るほどになっていた。

二枚の爬虫類めいた翼、二本の足を持つその怪物は、

「クエレブレ！」

女神官が鋭く叫んだ。鋼クの鱗エを持つ竜は、答えるように吠える
と、翼を広げて襲いかかってきた。

クエレブレ。矢を通さぬほど堅い鱗をもち、毒の息を吐く翼竜。
家畜や人の血を吸って生きる怪物である。

クエレブレは馬車の正面の方向から真っ直ぐ向かって来た。

「右に進路を向けろ！」

「承知ッ！」

蜥蜴僧侶が手綱を操り、馬車を右に向けて走らせる。クエレブレが、馬車を追いかける様な形になった。

「うおおおおお！」

「きゃああああ！」

急に襲いかかった慣性に、モトラドは楽しそうに、女神官は恐怖を覚えて声を上げた。

「そ、それにしてもクエレブレは薄暗い場所で生息すると怪物辞典に書いてありましたが……どうしてここに居るんでしょう?！」

女神官は驚いていたが、

「それはとりあえず後！ 倒してから考えなさい！」

妖精弓手は弓を引き絞り、矢を放った。

ひょう、と空気を斬る音がして、矢は真っ直ぐクエレブレに飛んでいく。しかし、木芽鏃の矢は強固な鱗にぶつかるとパン、と弾かれて地に落ちた。

「むう、堅いわね……」

「たしか、クエレブレの鱗は鉄のように堅いそうです。」

「早く言ってよ！」

「投剣も意味が無いな」

ゴブリンスレイヤーは片手剣を鞘に戻した。

次に武器を構えたのは旅人だ。

「では、パースエイダーを試してみますか」

旅人はカノンホルスターに戻し、腰の後ろから森の人を抜いてクエレブレに照準した。

レーザーサイトは、クエレブレの右目に向けられている。

普通であればレーザーが目に入れば視界を奪うことも出来るはずだが、動じている様子はない。目が見えていないのか、単純に効かないのか。

「目にレーザーポイントって、罰金モノのラフプレーじゃない？」

「不意打ちよりマシだよ」

モトラドの茶化しに適当に答えると引き金を引いた。

パンと乾いた発砲音がして、弾丸は眼球に吸い込まれる様に命中した。

しかし、

「クエレブレって、目も硬いの………？」

二十二口径の弾丸は、眼球によって弾かれた。

クエレブレは姿勢を少し崩しつつも、止まること無く馬車に向かって飛んできている。

要するに、全く効いていない。

鉦人道士が蜥蜴僧侶に叫んだ。

「鱗の！ お前さんの親戚だろ、話でもつけてくれんか！」

「あいにく、里帰りはしばらくでしてな！」

それに、と馬の手綱を握りながら、

「同性の竜が二匹そろったら、殺し合いしか無いでしょうや」

「これだから血の気が多いのはいかなのだ！」

旅人は、必死に馬車にしがみつくと女神官に聞いた。

「あの、あの竜の弱点って何かわかりますか」

「ええと、確か……首の下の皮膚が柔らかいはずですよ！」

「首の下ね！」

その会話を聞いた妖精弓手が弓をつがえ、狙いを定める。
が、

「アイツいつちよ前に防具なんて着けてるわよ！」

クエレブレの首には、鉄板を重ねて作られた防具が装着してあった。上手く重なる作りになっていて、首を曲げるのも苦にならないようである。

「人工物を装着ってーことは……どっかの闇の魔術士かなんだかの使いつ走りか」

「石の街の首魁の手の者か」

鉱人道士とゴブリンスレイヤーがあたりをつける。

そうこうしているうちにクエレブレは馬車との距離を縮めている。

「ふんー！」

あわやと言うところまで迫りくる翼竜に、ゴブリンスレイヤーが仕掛けた。

一投したのは唐辛子やその他諸々を卵に封じ込めて作った催涙弾。

如何に全身を強固な鱗で覆い、眼球さえも鋼鉄の堅さを誇ると言っても、眼球は眼球だし、鼻も口もある。

そしてそれらに真つ赤な粉塵が襲いかかった。

目や鼻、口内を激しい痺れに侵された翼竜は羽ばたいて居られず、地面に激突した。

失速したクエレブレの影は、みるみる小さくなってゆく。

「や、やりましたか……」

「いや、ただ動きを止めただけだ。直に持ち直して襲ってくるだろう。」

おそろおそろ言った女神官の希望的観測を、ゴブリンスレイヤーが切って捨てた。

「それに、俺たちが来ていると言う情報を知られたくないし、この馬車の速度では逃げられん。ここで殺す。馬車を止めてくれ」

ゴブリンスレイヤー達の馬車は道から大きく外れた場所で停車した。

「でも、どうやって倒しましょう。」

フルートを組み立てながら旅人が言った。

「ボクのカノンは鉛弾を撃つので、貫通力は低いです。森の人はカノンよりも威力が低いのでやっぱり貫通しないと思います。フルートが一番威力は高いですが、あの鱗を抜けるかわかりません。あの……翼竜の首の鉄板も同じです。」

「ふむ」

「拙僧が彼奴の首を引っこ抜きますか？」

「ええと、毒の息を浴びるかもしれないので……」

あんまりな蜥蜴僧侶の提案に女神官は冷や汗をかいた。

ゴブリンスレイヤーは思案する。自分のポケットの中を一つ一つ確認しながら作戦を考える。

この一党の火力は、旅人のパースエイダー、蜥蜴僧侶の怪力による斬撃、鉋人道士の〈石弾〉だ。巻物は今回持っていない。

旅人は言わずもがな、竜牙刀による切り込みはあの鱗に通用すると思えない。

〈石弾〉もどちらかという打撃だ。確実に息の根を止める事ができるか不安が残る。

〈石弾〉で首の骨を折るか？　しかし眠るときに自分の体の上に首を置くほど柔らかい竜の首を折れるかどうか。

鱗を剥がせば攻撃は通じる。馬鹿な、乗っている間に地面にこすりつけられたら紅葉おろしになって終わりだ。

あの鉄の鱗をどうにか……。

そこで、脳裏に一筋の閃光が迸った。

クエレブレはもうやってくる。

ゴブリンスレイヤーは、旅人に言った。

「錆びていたなら打ち抜けるか？」

クエレブレはまもなくしてやってきた。口から毒気を漏らしながら、あの馬車を狙って飛翔する。

愚かにも停車し、クエレブレと相対しようとしている、奴らの馬車を発見した。

愚かだ、とクエレブレは思った。

この自分の鱗はへ火球ですら耐えるのだ。あの貧弱な一党などが勝てる訳がない。

全員殺して肉塊に変えてやる。

クエレブレは馬車を中心に組んだ陣形の最前線にいる蜥蜴僧侶めがけて襲いかかった。

まず一つ。

そこでクエレブレは、自身の体が朽ち始めているのを感じた。

「へ白亜の層に眠りし父祖らよ、背負いし時の重みにて、此れ為る者を道連れに」

〈腐食〉の祈祷。金属物を腐らせ、たちまち錆の塊に変えていく術。

蜥蜴僧侶の祈祷によってクエレブレの鉄の鱗が腐り、朽ち始めたのだ。

蜥蜴僧侶の足下では竜牙の触媒が沸騰している。

自慢の鱗が醜く泡立ち始めるのをみて、穏やかでは居られない。鱗の沸騰する痛みに耐えかねて、クエレブレはズシンと音を立てて地に落ちた。普通であればこの程度の衝撃なんとも無いかも無いはずだが、今は腐食している。落下の衝撃で鱗にビキビキとヒビが入ってゆくのがわかった。

猿ぐつわのように括られた防具も、〈腐食〉に当てられて腐り落ちた。だが、クエレブレにそんな事を気にしている暇は無かった。

翼も錆ついて飛び立つ事もかなわない。

急所だけでも隠さなければ。

クエレブレは地面に首の弱点を隠すように倒れ込んだ。

これで、直ぐに殺される事はないだろう。

クエレブレは、周囲を目玉をぐるぐると回して見回した。

最後に見たのは、謎の筒をこちらに向ける帽子の冒険者だった。

旅人はフルートの引き金を引いた。鋭いライフル弾は錆によって出来たヒビを押し破って体内に侵入し、脳をズタズタに破壊した。クエレブレはしばし痙攣していたが、やがて絶命し、それきり動かなくなつた。

「これでおしまいって事かしらね」

「お疲れ様ー」

はあ、とため息をついて妖精弓手が荷台に腰掛け、足をぶらぶら振った。モトラドが他人事のように労をねぎらう。

高速で走る馬車にしがみつくので精一杯で、女神官も疲労困憊のようだ。

「面倒なことだ」

クエレブレの死体を鉋人道士と検めてきたゴブリンスレイヤーが戻ってきて、言った。

「それは、なんですかな」

蜥蜴僧侶が尋ねたのは、ゴブリンスレイヤーの持つ錆びた鉄板だ。

「あの翼竜がなんで毒の息を吐かんかったかわかったわい。」
酒瓶を呷り、

「猿ぐつわがしてあったからの。飼い主のせいだ」

「飼い主？」

「あの、首の鉄板をしつらえた奴だ」

そういつてゴブリンスレイヤーは錆びた鉄板の欠片を投げ捨てた。

「む」

「あっ！」

「これは……」

蜥蜴僧侶、妖精弓手、女神官が三者三様の反応を見せたが、考えたことは同じだった。

円環の中に、瞳のような紋様。緑の月を模倣モチイフした、外なる知恵の神の御印。

「覚知神だ。厄介なことだ」

ゴブリンスレイヤーは、面倒くさそうに言った。

石の街探索①

夜である。

石の街ももうすぐと言う場所で、ゴブリンスレイヤーの一党は野宿をしていた。

「明日の朝、街に潜入する。」

ゴブリンスレイヤーのその案に反対する者はいなかった。ゴブリンは月と共に目が覚め、太陽が昇ったら眠る生き物だ。すわ長丁場ともなる探索となれば、朝に仕掛けるのは最適解といえた。

と言うわけで、夜の見張りである。

術者を休ませるため、見張りはゴブリンスレイヤー、妖精弓手、旅人の交代制となった。

一人目であるゴブリンスレイヤーがパチパチと枯れ木を弾くとき火を眺めていると、

「ね、起きてる?」

「……はい?」

妖精弓手の声と旅人の返事が聞こえた。

「お前達の番はまだだろう」

「だそうです」

「まあ、ちよつとくらいいいじゃん」

「はあ」

毛布を掛けて寝転がりながら話し始める妖精弓手と、カノンを胸の前で構えて横になる旅人。ゴブリンスレイヤーは、妖精弓手に早く寝ろと言っても聞かないことを、まあまあ長い付き合いから知っていた。

妖精弓手は、少し前から気になっていたことを聞いてみることにした。

「そのパースエイダー構えるのって、いつもなの？」

「そうですね、野宿の時も、国の宿に泊まって居るときも構えています。」

「いい心がけだ」

いつも鎧兜を外さないゴ布林スレイヤーが言った。

「いつゴ布林に襲われるかもわからない」

「ボクの場合は同じ旅人とかですけど。やっぱり警戒しておきます。殺されそうになったこともあるので。」

「ああ。」

妖精弓手は、心なしかゴ布林スレイヤーの声が柔らかい気がした。いや、気のせいなのかも知れないが。

そういえば石の街に出かける時に呼びに言ったとき、パースエイダーの抜き打ちの練習をしていた気がする。

警戒心を解かない所とか、ストイックな所とか、旅人とゴ布林スレイヤーは似ている箇所が多いのでは……。

妖精弓手は内心慌てて話題を変えることにした。どんな化学反応が起こるかもわからない。

「あなたって、この冒険が終わったら旅に戻るのよね？」

「ええ、必要な燃料分のお金が貯まるので、そしたら出ようかなと。」

「元の世界とは違うけど、良いの？」

「そしたらその世界を旅するだけです。とりあえずこの国を見て回って、しばらくしたら都のほうで魔術に詳しいところに相談に行こうと考えてます」

「永住とかは、思わないの？」

「まあ……今のところ旅を止めるつもりはないですね」

「お前の、家族は良いのか？」

尋ねたのはゴ布林スレイヤーだ。鉄兜をわずかに動かして言った。

「家族……というか故郷が滅んでしまったので。消息もわかりません」

「そうか……すまなかった」

「いえ、気にしてません。大丈夫です」

旅人は少し考えて、

「ゴ布林スレイヤーさんは、ご家族は？」

「両親は流行病で死んだ。姉が居たが、ゴ布林に殺された」

「……それは、失礼しました。」

「十年も前の事だ」

三人の間に、沈黙が訪れた。風が吹き、草々がざわめく。

妖精弓手がなんと叫びたなら良いか悩んでいると、旅人が言った。

「ゴ布林、皆殺しに出来ると良いですね」

その発言はどうなのか。妖精弓手がバツと振り返ってゴ布林スレイヤーをみるが、いつもの鉄兜で表情はわからない。

ゴ布林スレイヤーは、

「ああ。」

と一言だけ言った。そして、

「ゴ布林は皆殺しにする」

それだけ言った。

翌日。一党は、石の街が目と鼻の先に見える所まで来ていた。

石の街はかなりわかりやすい造りをしている。

上から見ると円状になっており、中心でクロスするように十字に大通りがある。同心円状に道が丸く走り、中央が教会や省庁舎と言っ

た公共機関、一つ外側に商店、一番の外側に民家が連なっている。

ゴブリンスレイヤーが二枚のレンズと革で作った即席の遠眼鏡で、旅人がフルートのスコープで石の街を伺うと、案の上ゴブリンが見張りに立っていた。集中しているように見えなかったが、鳴子ぐらいにはなるだろう。油断は出来ない。

「どうやって侵入しますか?」

「見張り打ち抜く?」

旅人が言い、妖精弓手が物騒な提案をした。

「それは、不味いと思います。」

反論したのは意外にも女神官だった。

「その心は」

「反対側の入り口のゴブリンに見つかるかもしれませんが。」

今回探索する石の街は、これまでの遺跡や洞窟、迷宮とは訳が違う。

狭い空間ではないのだ。むしろ吹き抜けていて、見つけやすいさも高くなっている。

ランタンや松明がいらぬのはありがたいが、二階から投石の可能性もあるのだ。

「なら、アレしかねえか」

「ああ」

「坑道だ」

ボコ、と土を押しつけて、薄汚れた鉄兜が地面から生えてきた。

否、ゴブリンスレイヤーが、鉋人道士によって拵えられた〈トンネル隧道

から地上に上ったのである。周囲を警戒しながらゆっくりと穴から出ると、そこはとある民家の庭だった。

腰につないでいた縄を近くの木に縛り付けると、二度引いて合図

を送る。その後、妖精弓手、旅人、鉋人道士、女神官、蜥蜴僧侶の順番で穴から出てきた。

モトラドは馬車と共に留守番である。

「退屈」

近くでは馬が草を食んでいた。

「うえ、口に土が入った……」

「静かにしろ」

ウンザリしたように言う妖精弓手の口元には、手ぬぐいが巻かれていた。炭と薬草を中に摘めた簡易防毒面である。

あとから来た仲間も装着している。

「行くぞ」

石の街探索、開始。

外にいては直ぐにバレる。すぐそばの民家の窓を開け、中に入った。

一階は、荒らされて無残な姿になっていた。

家具は滅茶苦茶に破壊され、中身は全て床にぶちまけられている。赤黒くこびりついた血だまりの跡が特徴的だった。

壁には血で汚い字か、絵か、判別のつかない落書きで汚され、血

臭が充満する原因となっていた。

ゴブリンはいない。

術者三人は一階の搜索を続け、前衛三人が二階へ向かう。

二階には部屋が二つあり、どちらも戸が閉まっていた。

ゴブリンスレイヤーが剣を抜き、旅人が森の人をドロウ。ハーモニカ型のサイレンサーを装着した。妖精弓手が黒曜石のナイフを抜いて、後ろを警戒する。

アイコンタクトをとる。

ゆっくりとドアを開けると、ゴブリンがいた。

ベッドの上でいびきを掻いて眠っている。

床に落ちているのは破かれた絵はがきか。綺麗な状態であれば美しい風景を楽しむことが出来ただろう。

ゴブリンスレイヤーは短剣に持ち換えると、眠っているゴブリンの首元に振り下ろした。

短剣が喉を抉り、ゴブリンはたまらず覚醒した。しかし、激痛と呼吸困難で悲鳴をあげる事は出来ない。

そのゴブリンは、己の血に溺れて絶命した。

もう一つの部屋も同様だった。やはり短剣を突き立てて殺す。旅人は、クリアリングの終えた部屋のドアに隅に白墨で印をつけた。

「どうだ」

民家を一つ検めた一党は、二階廊下に顔を合わせて集まった。

「住民の死体がありませんな」

「喰ったか」

「かもしれませんね……」

「なにか手がかりはあったか」

「それらしいものは何も」

「では次だ。」

そういうと、ゴブリンスレイヤーはゴブリンの腹を捌き、手ぬぐいをつつ込んだ。

旅人が尋ねた。

「ええと、それは？」

「におい消しだ。ゴブリンは女子供の匂いに敏感だからな。最初に静かに殺せて良かった」

「……なるほど」

旅人が絞り出すように言うと、鉾人道士が思い出したように言った。

「って、娘ツ子ら、匂い袋はどうしたい」

鉾人道士の言う通り、小鬼退治の乙女の嗜みである香袋を、妖精弓手も女神官も持ち合わせていなかった。

「旅人さんの分も買おうと思ったんですけど……」

「油の塊ファットバグが大量発生してて、その対策で香袋が売り切れてて」
悲しそうに二人は答えた。

旅人は、

「ええと、民家を通って移動していくわけですから、あんまり匂いが見つかる事はないんじゃないかと」

「念には念を入れるべきだ」

「にべもない。」

旅人は、妖精弓手と女神官を見たが、

「慣れますよ」

「慣れるわよ」

旅人は、ゴブリン退治の洗礼を受けることとなった。

石の街探索②

「これからどうしますか?」

ゴブリンの血で衣装を赤黒く汚し終わった旅人が言った。

ここからどう進むかで今後の結果が変わってくる。

場所は石の街。五百を越える建物。首魁の現在地は不明。ゴブリンならば一番高い建物だが、ゴブリンで無ければ街の何処か。

さて。

「定番通りなら、首魁は中心部にいると決まるとるが、今回はどうじやるな」

鉦人道士が触媒の入った鞆の中身を整理しながら言った。

「どう見る」

「拙僧が考えるに」

蜥蜴僧侶は喉をゴロゴロと鳴らし、

「首魁はすでにいないかと」

「え?」

女神官が戸惑うように言った。

「何故ですか?」

「それはですな、我らがこの街に入ることが出来て、且つ警備がゴブリン並だからです」

「なるほど」

ゴブリンスレイヤーが唸った。

「え? どゆこと?」

妖精弓手は訳がわからないようだ。女神官もいまいち腑に落ちないようで目を瞬いだ。

その説明を引き受けたのは鉦人道士だった。

「儂らはクエレブレを街の外で討伐したろ。多分、それはこの街

を滅ぼした黒幕の手下。死んだとなりやあ直ぐに気づくだろな」

「なのにゴブリンだけというザルな警備で、魔術で防御を固めた様子も無しか」

ゴブリンスレイヤーが言った。

「そういうことですか」

そうやって蜥蜴僧侶は腰の巾着からチーズをひとかけら取り出すと口に放り込んだ。「うむ、甘露」

「無論、死体を確認せねば安心は出来ぬし、街の中に入れる事が目的の罠と言うこともありませんが」

「いや」

ゴブリンスレイヤーは言った。

「今の指揮官はゴブリンだと考えるべきだ」

予想の類いは想像力が尽きぬ限り無限に膨らむ。悪い予想で動きを制限しては意味が無い。石橋を叩いて壊すなど本末転倒だ。

「これから街の中央、庁舎に向かう。首魁か、ゴブリンの上位種がいたら叩く。例の黒い霧が出たら、〈浄化〉で時間を稼ぎ、〈隧道〉で脱出する。解毒薬も取り出しやすいよう準備しておけ」

「はいー」

「わかりました」

一党は民家から、窓から降りて抜け出した。

先頭はゴブリンスレイヤー、続いて妖精弓手と次々に道路を駆け、向かいの民家へ移動する。

殿である旅人が最後に道を駆けつけたとき、近くの家の二階で光が反射するのを見た。

旅人が、全力で走って民家のドアに飛び込むと同時に、弾丸が飛んできてすぐ脇を通り過ぎていった。石畳に弾かれ、火花を散らす。

「何今の音ー」

妖精弓手が悲鳴を上げるが、説明している暇はない。

旅人は体を最低限だけ出して、発砲音の元に森の人を構えた。

向こうは連続して発砲するが、どれも狙いはずれていて、辺りの石畳や石壁を少し削った。

「見つけた」

ゴブリンだ。首にバンダナを巻いていて、自動式のハンド・パースエイダーを持っている。小鬼銃手ゴブリンガンマンと言ったところか。

旅人は冷静に狙いを定め、引き金を引く。プシュ、という抑えられた発砲音と共にサブソニック弾が発射され、小鬼銃手の眉間に命中した。

威力こそ抑えられているものの、ゴブリンの頭蓋程度は貫ける。小鬼銃手は眉間から血を流して絶命した。

命中したのを確認すると、旅人は家の中に戻った。

「な、何が起きたんですか?」

女神官が戸惑いながら聞いた。

「すみません、ゴブリンに見つかりました。パースエイダーで狙撃されたので、殺しました。ただ、発砲音で周囲のゴブリンを起こしてしまつたみたいです。」

「どうするの、オルクボルグ!」

「二階のドアと窓を塞げ、家具を移動させろ。そのまま二階へ向かって、ゴブリンがいたら殺せ。あと、二階の部屋のドアも剥がしておけ」

「? オウよ、下は任せっぞ!」

「私も上に行く!」

鉱人道士が手斧を抜き、妖精弓手が黒曜石のナイフを抜いて二階へ急ぐ。

「では、家具を動かしますか、手伝って頂けますかな」

「は、はい!」

女神官と蜥蜴僧侶が家具を動かし、扉を塞いでいく。

「お前は窓から入ってくるゴブリンを撃退しろ」

「わかりました。貴方は?」

「ここは民家だ。油を探す。足りなければ俺の手持ちから使うが」

その発言を聞いて、蜥蜴僧侶はニヤリと、女神官は呆れたように

笑った。

「あいつは怒るかもしれん」

ゴブリン達は、ぎやいぎやいとわめいて仲間を呼んでいた。近くに侵入者がいるぞ。男なら殺せ、女なら犯せ。捕まえた奴が全部もらえるぞ。

真昼に寝起きをたたき起こされたといえ、十匹近く集まり、ちよつとした群れになっていた。もう少しすればもつと集まるだろう。

この家に逃げ込んだみたいだ。行け行け。

ゴブリン達はドアに駆け込んだが、何かがつつかえてある様で開けることが出来ない。

一匹が叫んだ。窓から入れるじゃないか。

そう言つて割れた窓から飛び込もうとすると、パシユ、という音と共に仲間が頭から血を流して倒れた。

次々と仲間が倒れていく。群れを蹂躪され、怒ったゴブリン達は窓に殺到した。誰も彼も死にたくないのに、近くの奴を盾にしながら近づいていく。

騒ぎを聞きつけて、家の前の群れはどんどん大きくなっていった。ふと、音がやみ、仲間が死ななくなった。

何が起きたのかわからなかったが、誰かがチャンスだと言つたので、闘の声を上げて突っ込んだ。

もたもたときこちない仕草で窓から次々とゴブリンが侵入していく。

一匹目が最初に気づいたのは、床がやけに滑るということだった。

次々と入ってくるゴブリンに押され、家の奥に押し込まれる。冒険者は何処だ。早く殺してしまおう。ここにはいないぞ。じゃあ二階に逃げ。

だが、階段は何か木の板が押し込まれていて、通る事が出来ない。

隙間から登って行こうとして、二階に居る鉄兜と目が合った。汚らしい革の鎧。小振りの盾に、俺たちにぴったりの剣。殺してやるぞ。

そう叫んだ彼の元に、緑の薬液が入った小瓶が放り込まれた。

「今回は……まあ、仕方がないか……」

疲れたように妖精弓手が言った。

「この街の建材のほとんどが石だ。あまり燃え移ることはないだろう」

「そういうことじゃないんだけど……」

ゴブリンスレイヤー一党は、火災中の民家から三軒離れた家に身を隠していた。

先ほどゴブリンがあふれた家は、炎が侵入者を家もろとも舐め尽くしていた。

家具が燃え、焼け落ちたドアから火だるまのゴブリンが飛び出したのが見えた。

液体火薬特有の白煙と、中の木材が燃える黒煙が混ざって登っている。

「それにしても、隣の家の窓が近くて、飛び移れて良かったですね」女神官は、額の汗を拭い、息を整えて言った。

「この街では火災に備えて、二階の窓を一つは隣の家の窓と近くなるように作るらしい」

「お前の、液体火薬も役に立った」

「どうも」

ゴブリンスレイヤーは窓の外をうかがう。

ゴブリン達は、外をうろつき回っているが真面目にゴブリンスレイヤー達を探している様子は無い。

おそらく、家に突っ込むとまた火に巻かれると考えているのだろう。結果として安全と楽の中間点、「外を歩き回って探す」ことにした

ようだ。

しばらくは見つかからないはずである。

「しかし、これではうかつに動けませんな。」

蜥蜴僧侶の言うとおりである。

横の移動は窓を経由するとして、道を渡るのは難しくなってしまうた。

ゴブリン達が起きてしまった今、一度見つければ数十匹に囲まれるのは想像に難くない。

しかも、

「ゴブリンってパースエイダーを使えるんですよね」

旅人が遭遇したゴブリンは、この世界では普及されていない武器、パースエイダーを使っていた。

「でも、この世界にはパースエイダーって」

「無い」

ゴブリンスレイヤーは言い放った。

「そもそもゴブリンどもは短筒も使わん。管理ができんからな」

「つまり、」

「お前の他にも我々の世界に来た人間がいて、そいつから奪った。」

一党の緊張感が高まった。

最近の旅人との冒険で、パースエイダーという武器の優秀さは嫌と
言うほどわかっている。

であれば、その発射口がこちらに向いたときの脅威もわかると言う
ことだ。

命中は不安。しかし、当たれば剣よりも血があふれ、矢よりも遠い
位置から届く。見てから回避は不可能。

撃つだけでも驚異なのに、指一本で引き金を引けるものだから誰が
持っただけでもおかしくない。

「でも、旅人でも、商人でも、そんなに多くのパースエイダーは無いと
思います。少なくともゴブリン全員に渡るほどでは」

旅人は落ち着いた口調で言った。

「まずは、相手が何丁持っているか探すために、ボクのいた世界の人や物を探しましょう」

石の街探索③

野伏である妖精弓手と、パースエイダーやそれに関する知識が豊富な旅人が索敵を行うことになった。

窓から静かに屋根の上に登る。

石の街の家は長方体といえるような形をしているので、下から見えないのは好都合だった。

「貴女は何か、検討はついているの?」

妖精弓手がマントを被り、姿勢を低くしながら尋ねると旅人はそうですねと言って、

「旅をする上で街や国が見えたら、旅をする人はやっぱり、」

「やっぱり?」

「素直に大通りから入ると思います。何か悪事を働く人も、まずは普通の旅人や商人を装って街に入るので」

二人は、姿勢を低く保って大通りに面する家まで移動していった。その間も大通りを見てみたが、包丁や折って手槍の長さにした鋤を持ったゴブリンを見かけたが、パースエイダーを持っている個体は見つからなかった。

渡る屋根が無くなった。大通りまで来たからだ。

大通りは馬車の往來を意識してか、結構な道幅があった。三車線ほどの広さ。

「血の跡……」

町の中央の庁舎に繋がる道に、細長い血痕が残っていた。二本の赤い線が、平行に庁舎まで伸びている。引きずったというより、車輪でつけた痕に見える。

「街の真ん中に血が集中してますね」

妖精弓手が旅人からスコープを借りて見てみると、他の大通りからも血が伸びているのがわかった。

「やっぱり、中央に亡骸を集めてるみたいね」

「そう考えて間違いないですね」

庁舎をよく観察してみると、最上階に何かパースエイダーと思しき何かを抱える大きな体躯のゴブリンの姿が見えた。

「田舎者が英雄か判別できませんが、ゴブリンがパースエイダーを持っています」

「何匹いるかわかる？」

「二匹しか見えないのでなんとも」

「ね、貴女の世界のものは見つかった？」

「少なくとも、西から東の大通りにはなさそうです」

と言うわけで、妖精弓手達は西の大通りから、南の大通りまで移動した。

そして、

「見つけた」

「あれがそうなの？」

二人の目線の先には、二台の車両があった。

一台は、幌付きトラック。民家に頭から突っ込んでいるが、爆発はしていない。トラックの回りに金属製の箱がいくつかが転がっている。

もう一台は、装甲車。グレーの角張ったボディで、上部にガトリング銃が設置されていた。

「馬車よりも狭くて暗そうね。動くの？」

「燃料があれば、またはゴブリンに手をつけられていなければおそらくは」

周囲には、ゴブリンは一匹も居なかった。

おそらく、先ほどの騒動は西の通りの出来事だからだろう。南はあまり騒ぎになっていないようだ。街の入り口に欠伸をこぼすゴブリンが居るくらいである。

「トラックの方は調査出来そうですね」

「あの家に突っ込んでる方？」

「はい」

「じゃあ行こっか。私は見張りやつとくから、搜索よろしく」

事故現場の家の窓から侵入し、眠っていたゴブリンを殺して、ゆっくりと一階に降りた。

一階は半壊しており、家として機能していなかった。窓とドアが集まる、家の正面に突っ込んだせいだろう。鍋やまな板と言った台所用品や砕けた食器が散乱していた。

トラックの窓ガラスも砕けて家の中に散らばっていた。音を立てないように気をつけながら運転席に近づいていく。

旅人が運転席を確認すると、血で汚れたエアバックがしぼんでハンドルから垂れていた。

助手席も同様である。どちらにも人は乗っていないかった。

運転席の足下を見してみると、弾が一つ落ちていた。細長く、先端が鋭くなっている。

「連射型かな。ライフルかな」

そういつて旅人はつまみ上げ、ポケットに入れた。

座席の裏も確認。ハンド・パースエイダー用の弾倉が一つ転がっていた。こちらにも忘れずに回収する。パースエイダーラックは、二つ備え付けてあった。

運転席を確認し終わると、荷台に回りこんだ。

荷台は、ひどい有様だった。それなりの強度をもつカーボン製と思しきケースは、鍵を壊され、中身が抜かれていた。

わずかに残っている一センチに満たない大ききで光るそれは、ダイヤモンドだ。他にあっただろう宝石類はゴブリンに持っていかれたのだらう。

そのほかにも、引き裂かれた服や中身が空の透明なタンクが転がっていた。

これだけ荒らされて、タンクの中のガソリンが漏れていないのが不思議なくらいだった。

そのトラックの荷台、一番奥に、一つの段ボール箱が置いてあった。ゴブリンは全く興味を抱かなかったのか、壊してもつまらなさと考えられたのか、目立った損害はない。

旅人は罨が無いことを確認すると、ゆっくりと開けた。

中身は、グレーの粘土。セロハンで覆ってある。五キロほどだろうか。

そしてもうひとつ、小さな段ボール箱が箱に入っていた。中身を開けると、折りたたまれた一枚の紙と、ビニールに入った無線機、そして同じくビニールに入ったボールペンサイズの金属の棒が入っていた。

旅人は、紙を広げた。

「プラスチック爆薬セット。説明書をよく読み、正しく使用しましょう！」

×××

メーカー名

日は天辺を越え、ゆっくりと西に向かっていった。

「庁舎まで血の引きずった痕あり、と。パスエイダーを持った見張りもいたようですし、中央に何かあるのは明確ですな」

ゴブリンスレイヤー達が隠れている家に戻り、顔を合わせて作戦会議である。

外を妖精弓手と鉞人道士が努め、残りのメンバーで案を探る。

「ゴブリンがパースエイダーをどのくらい保持しているかはわかったのですか？」

女神官はそう言って干し肉をかじった。

固い肉をかじると、塩味がしみ出して唾液腺を刺激した。

「弾の口径の種類と収納の規模からして、連射型パースエイダーが二丁と、ハンド・パースエイダーが二丁ほど。弾は四百発くらいですわね」

旅人が携帯食料を食べながら言った。細長いブロック状の物体なのだが、何で出来ているのかわからなかった。美味しいのだろうか。

「射程はどのくらいかわかるか」

兜の隙間からパンをねじ込んで食べ終わったゴブリンスレイヤーが言った。

「パースエイダーの性能によりますが、有効射程最大で一キロ、届くだけなら四キロ」

一党の緊張が高まった。

「外周まで十分届くわね」

「しかも庁舎の周りは馬車の往来を円滑にするために道が広くなっている。隠れる場所がない。」

ふむ、ゴブリンスレイヤーは顎に手をあて

「どう見る」

「籠城戦ですな」

蜥蜴僧侶が言った。

「食料は街の人間。町の中央、最も高い位置という有利な場所に有利な武器。そして侵入者は確実にさらされる」

「奴らはあの庁舎から出ることはないだろう。一度有利だと考えたゴブリンは、それに固執して変えることは無い」

「どうやって我々はあの城に入り込むべきか」

うーんと頭を抱えた女神官が言った。

「大通りを避けて、通りと家を渡りながら庁舎に近づくのはどうですか？」

「時間が掛かりすぎて夜になりますな。奴らの時間になると攻撃はおろか撤退も難しくなります。」

「〈隧道〉で庁舎の下までつなぐのは如何が？」

「スマンが、さすがにあの距離の維持は難しいな。石を掘るのもなおさらな」

「耳長の弓だの、旅のパスエイダーだので銃手を撃ちまえばいいじゃねえか」

「この距離じゃさすがに無理よ。届く前に見つかっちゃう。」

「発砲音で気づかれてしまいます。抑制器で庁舎までは聞こえませんが、周囲のゴブリンは気づくと思います。液体火薬も多くないので、さつきみたいに何度も囲まれたら脱出出来なくなります」

「と、なると」

ゴブリンスレイヤーが言った。

「結論は、上からの射撃もゴブリンの包围も物ともせず、迅速に我々が突貫できる、そんな方法だ」

「まさしく無理難題と言ったところか」

蜥蜴僧侶が苦痛げに瞑目すると、いえ、と旅人が言った。

「今ならあります。一台だけ、その無謀をかなえる事ができる車両が」

旅人は、トラックで見つけた戦利品を置いて言った。

その日の昼。一匹のゴブリンは聞いた。

昨日か一昨日に来た謎の鉄の箱が、ヴウンと呻り声を上げたのを

石の街攻略①

石の街、中央に位置する庁舎の四階。誰も居なくなった冒険者ギルドにて。

その一室、支部長室の席に、その男は座っていた。

黒のローブに身を包み、唯一露出して机を苛立たしげにコツコツと叩く右腕は昆虫の様な節がある。その腕からは鋭利な指が八本生えていた。

まさしく^{ノンブレイヤー}祈らぬ者の姿であり、その腕は悪魔の手とも呼べる醜さであった。

そして、彼は大変に苛立っていた。

知識神から天啓を受け、悪魔に身を捧げたのは良い。

無事に悪魔になり、不愉快な石の街を廃墟に陥れたのも良い。

だが、下つ端以下の小鬼どもがまるで使えない。生け贄にすると言っているのに、こつそり食べたり犯そうとするのだ。始めに十匹ほどを目の前でミンチにしてやらなかったら、今でも反発して生け贄候補を食い散らかして居たことだろう。

腹立たしい。空っぽの知性を持つ奴らは覚知神に選ばれた私の言うことだけを聞いていれば良いのに！

オマケに、街の外を見張らせていたクエレブレの反応が消えたのだ。これから冒険者やらなんやらが来るだろう。

まだ計画は整っていないと言うのに……！

怒りが募り、腕を机を蹴飛ばした。樺の木で出来た机は壁にぶち当たって粉碎された。

またやってしまった。悪い癖だ。

ため息をつくくと、支部長室のドアが不躰に開かれた。入ってきたのは小鬼が二匹。

何度言ってもノックを覚ええない。きっと学ぶ力が無いのだ。哀れな奴らめ。

「何だ。侵入者か？」

どうやら、見たことのない馬車が二台。街の外れに飛び込んできたらしい。

「それで、物は持ってきたのか」

その質問で、小鬼達は焦り始めた。

大きいのと、押しても簡単に動かないので置いてきたと言う。馬鹿だ、本当に馬鹿だ。

「だったら……田舎者でもつれて引いてくれば良いだろうがッ！」

腕を振るうと、二匹の内の一匹が爆ぜた。

此れこそが彼の授かった権能、生物を死に至らしめる悪魔の手である。デーモンハンド

血しぶきが、もう一匹に掛かり、少し赤くした。残った小鬼は、一瞬遅れて慌ててドアから飛び出していく。

急な発作で心臓が痛む。喉に絡んだ感覚がして咳き込むと、紫色の血塊が出た。

脳味噌が鋭く痛むが自分が悪魔になったと言うことが実感でき、不思議な充足感があった。唇から紫の血の線を引きながら口角をつり上げる。俺は、悪魔なんだ。

牛皮の椅子に腰掛けて体調が回復するのを待っていると、先的小鬼が戻ってきた。

ノックは相変わらず無いが、まあ良い。

そんな事よりも自分が少しばかり弱っていることを悟られる方が面倒だ。奴らは意地汚いので、少しでも弱ると調子に乗る。

「なんだ。報告の馬車は持ってきたか」

後ろを向いたまま尋ねるが、返事がない。

「尋ねているだろう。馬車はどうした!」

振り向いて立ち上がると、唐突に胸に衝撃が走った。勢いで椅子に戻されてしまう。

「な……」

胸を見ると、小さな穴が開き、そこから血がこぼれていた。

ゆっくりと正面を見ると、手に白煙を上げる鉄の塊を持った小鬼がにやけて立っていた。

更に続けて衝撃が全身を襲う。肩を叩かれ、指が飛び、片目が潰れた。

サツと血の気が引くのを感じる。

「な、何が起きたのだ……」

小鬼は、嬉しそうに飛び跳ねながら悪魔の手に近づくと、眉間に向けて鉄の塊を構えた。

パンという、乾いた音と共に悪魔の手の意識は途切れた。

彼が、ゴブリンの持つそれがパースエイダーと呼ばれる武器だと知ることには、ついぞ無かった。

「ボクが動くか確認します。」

最初に装甲車に近づいたのは旅人だ。

車両の後部にのみあるドアを確認するが、鍵が掛かかっていて開かない。

「やっぱりダメか」

旅人は車体の上に登り、銃座の近くのハッチに向かった。

ドアはともかく、ハッチに鍵があるものは少ない。旅人はハンドルを回してハッチを開けると車内に入っていた。

その装甲車は運転席と助手席以外は後部で向かい合うように座席が取り付けてあった。場所を持って余っていたのか、右側の座席の一角の席を二つほど取っ払って小さめのコンテナが置いてある。

鼻を抉るような屍臭がして、旅人は顔をしかめた。

運転席に一つ、助手席に一つ、コンテナにもたれかかるように一つ、座席の真ん中にうつ伏せに一つ死体が転がっていた。

「失礼します」

旅人はそう言って運転席の死体をどかした。

難儀しながら後ろの座席に動かすと替わって座り、刺しっぱなしのエンジンキーを捻った。

「頼む……」

祈りが届いたか、ガウンと呻りを上げてエンジンが回転を始めた。

一度エンジンを止め、旅人は立ち上がると、後部のドアの鍵を開けた。

鉄の箱が生き物ではあり得ないうなり声を上げた。

事前に決めた合図だ。もし動く事が可能ならば、装甲車が動き音が鳴ると。

「行くぞ」

ゴブリンスレイヤーが先頭に、装甲車の後部に走って行った。殿は妖精弓手。イチジクの大弓を構えて周囲を警戒している。

装甲車の元につくと同じタイミングでドアが開いた。

「死体が四体あります。どかすの手伝って頂けますか。」

ゴブリンスレイヤーと旅人が死体を外へ運び、鉞人道士と蜥蜴僧侶が道の端に並べた。弔ってやりたいが、時間がない。女神官が急ぎながら、それでいて丁寧に鎮魂を祈った。

全て運び終わったところで妖精弓手が弓を射ながら走ってきた。

「そろそろ奴らが起き出すわ！ まだ出せない？」

「もう大丈夫です！ 中に！」

最後に妖精弓手が車内に飛び込むと、鉦人道士がドアを閉めた。

「何この臭い」

「死体が四つこの中であつたからな……。〈浄化〉を頼む」

「はい！ 〈慈悲深き地母神よ、どうかその御手で、我らの穢れをお清めください〉」

地母神への祈りが届き、屍臭わだかまる車内は神の御業によつて清められた。

赤黒くこびりついていた血も、残留していた病原菌も奇跡によつて消滅した。

「臭い消し消えちゃったけど良いの？」

「これから敵陣に突つ込むのだ。どうせ見つかるのだから問題ない」

「これから出発します、シートベルトを締めるか、どこかにしつかりしがみついでください！」

とはいっても旅人以外は見たこともない代物だ。旅人が全員のシートベルトを止め終わる事には、窓の外からゴブリンがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

大通りで大人数で固まって居たのだから当然か。

エンジンをかける。

「出発しますー！」

旅人はそう言つて、アクセルを強めに踏み込んだ。

ゴブリンは、謎の馬車に乗り込む冒険者を見つけたとき、馬鹿な奴だと思つた。この俺らの街で隠れる場所などあるはずがないのに。

仲間を呼び、取り囲んでやろう。

そうして集まった小規模なゴブリンの群れ。

囲んで叩いて殺してやる。群れの一匹が突撃、と言おうとして、動き出した装甲車に潰された。

何かを踏んで少し揺れた装甲車は、豪快に走り出した。石の街の

舗装された道路を、灰色の装甲車が爆走して行く。見回り中のゴブリ
ンが石を投げつけたが、石もゴブリンも跳ね飛ばした。衝撃で飛び出
た目玉がフロントガラスにぶつかって潰れた。

助手席に座ったゴブリンスレイヤーが言った。

「速いな」

「速いです。もう着きます。」

信号も対向車も前方の車もない。

アクセルを踏み込めば、街の中央まであっという間だった。

石の街の中央、商店通りに入ると、ガンガンガン！ という鉄を叩
く音が車内に響いた。

撃たれている。女神官はたまらず悲鳴を上げた。

「ヒッ?!」

「庁舎が近づいてきました！ 術士さん！」

「鉱人的にぶっ壊すのは気が引けるんだが……仕方ねえ！」

「拙僧が抑えるのでご安心を」

シートベルトをはずし、蜥蜴僧侶に抱えられてハッチから鉱人道
士が顔を出した。

手に持っているのは土精を呼ぶ触媒である粘土だ。

「へ仕事だ仕事だ、土精ども。砂粒一粒、転がり廻せば石となる」
!

放られた粘土は、空中で回転しながら大きさを増していく。

〈石弾〉、ストーンブラスト 大玉拵え。バイジョン

大砲もかくやというスピードで放たれた〈石弾〉は、庁舎の入り口
にぶち当たり、大穴をあけた。

その穴めがけて突っ走る。装甲車のエントリーだ。

装甲車は受付のテーブルを破壊し、装甲車は停止した。

砂塵を巻き上げながら、装甲車は庁舎への侵入を成功させた。

旅人がシートベルトを外しながら言う。

「急いで脱出してくださいー！」

各々が慣れない手つきでシートベルトを外し、順に車外に飛び出

した。

妖精弓手とゴブリンスレイヤーが露払いをこなしていく。

「助かったぜ、鱗の」

「なんの、なんの」

爪を立て、尻尾を近くの椅子に巻き付けていた蜥蜴僧侶はもちろん、彼に抱えられた鉦人道士も無事だった。

旅人はライフル・パースエイダー、フルートを車内に残した。室内戦でライフルは却って不利だ。

「じゃあ、手はず通りに」

「お任せを」

最後に旅人と蜥蜴僧侶は、ドアを閉めてハッチから出た。いたずらをするように蜥蜴僧侶は車の鍵と、竜の牙を二つ車内に放り込んだ。旅人がハッチを閉めた。

片手剣を抜いて、ゴブリンスレイヤーが言った。

「準備は出来たか」

蜥蜴僧侶が竜牙刀を軽く振って言った。

「二分の隙もなく」

鉦人道士が、手斧を担いで言った。

「儂も問題ねえな」

妖精弓手が矢筒から木芽鏃の矢を抜いて言った。

「全然平気！」

女神官が錫杖を握り直して言った。

「わ、私もです」

旅人が森の人を抜いて言った。

「ボクも大丈夫です」

「では、行くぞ」

一党は、魔宮と化した庁舎の攻略を開始した。

二階に登ると、ゴブリンスレイヤーが言った。

「階段を塞げ！」

面会室と思しき部屋を回って、バリケードを急いで築いていく。机やら椅子やらを詰め込み、一階から二階への階段は埋められた。これで、一階に群がるゴブリンは上がってくることはないだろう。

そして、三階。この階から階段は建物の反対側に設計されているので、廊下を通らなければならぬのだが……。

ゴブリンとは、略奪生物だ。自分たちが何かを自ら一から作り上げることは希である。基本的には、襲った相手から奪ったもので彼らの装備は構成されている。

農夫上がりの新人冒険者を返り討ちにしたゴブリンは、安い革鎧に数打ちの剣。そこそこ中堅を返り討ちにしていたら青銅の鎧と剣と、盾を装備していることもあるだろう。

では、今回の場合は？

死体そのまま残った冒険者ギルドを歩き回ったゴブリン達の装備は。

「GGGGGOOOOAAAAA!」

四階へ向かう廊下。甲冑姿のゴブリンが、真っ赤に輝く剣を振り被って叫んだ。

槍や斧、その他冒険者の死体から奪った装備を固めたゴブリンの部隊が鬨の声を上げた。

石の街攻略②

「やはり、武器を選ぶならゴブリンに奪われたときを考えた方が良いな」

「それはアンタだけでしょ！」

目の前で道を塞ぐゴブリンども。彼らの装備は普段よりも格段に充実していた。

だれも彼もが胸当て以上の防具を着込み、鉄製の武器を持っている。

分隊長と思しき甲冑のゴブリンが、真つ赤な剣を振るって合図を出す。

三体の田舎者^{ホブ}が長物と盾を持って前に出た。ハルバードや長刀、大身槍とバラバラであるが、彼らは同じ動きで前方に突き出した。

身を守るように円盾やスパイクシールド、カイトシールドを構えている。

「密集隊戦法か」

ゴブリンスレイヤーが言った。だが、その口調に焦りは見られない。

「防具が整って無ければ意味が無いな」

ゴブリンの密集隊戦法に合わせて、ゴブリンスレイヤー、妖精弓手、旅人が前に出た。

槍を持った突撃部隊がゴブリン分隊長の号令によって走り出す……その前に冒険者の三人が仕掛けた。

ゴブリンスレイヤーが逆手に持った剣を投げうち、妖精弓手が矢を放ち、旅人が自動型パースエイダー、森の人の引き金を引いた。

三射三様の迎撃は全てゴブリン突撃部隊の首や目玉、眉間に命中し、陣形を打ち崩した。

ファランクスの基本は盾で体をすっぽり覆うことだが、どうやらゴブリンにそこまでの知恵は無かったようである。

「三二」

ゴブリンスレイヤーは落ちている槍を拾って突撃。妖精弓手と旅人は蜥蜴僧侶とスイッチ。入れ替わって前に出た蜥蜴僧侶が竜牙刀片手に躍り出る。

ハルバードを構えたゴブリンスレイヤーは、腰を落として穂先を真っ直ぐ突き出した。

辺境最強の彼のような美しい槍捌きなど、ゴブリンスレイヤーは出来ない。だが、ゴブリンなんぞにそのような高等技術は必要ない。

ちようどゴブリンの喉の高さで繰り出された突きは、田舎者の後ろから飛び出したゴブリンの喉を的確に貫いた。ズブリと刃が埋まった槍を引くと、ゴブリンの死体もくっついてきた。

「使えんな」

ゴブリンスレイヤーはハルバードを捨てると、腰から卍型の投げナイフを取り出した。

リーチは短い、相手の武器を絡め取ることもできる。

目の前では、蜥蜴僧侶がゴブリンの首を飛ばしていた。

「これで七！」

いずれもチャンピオンよりも少し小さい程度の恵まれた体躯で、装備を着込んでいたが、蜥蜴僧侶からすれば雑魚に等しかったようだ。

と、そこで急に蜥蜴僧侶が退いた。

「どうした」

「奴が厄介でしてな。特に武器が」

そう言つて蜥蜴僧侶は真ツ二つに切れた竜牙刀を捨てた。

ゴブリンナイト
蜥蜴僧侶が脅威と捕らえているのは、最後の一匹、全身甲冑姿の小鬼騎士だ。頭からつま先まで鋼で覆われ、カイトシールドと真つ赤な片刃剣を構えている。

「朱い刀身……、ヒートサーベル熱 剣だ！ 氣いつけろ！ かみきり丸、鱗の

！」

鉞人道士が叫んだ。

「魔劍の類いか」

ゴブリンスレイヤーは舌打ちをこぼした。

高熱で断ち切る刃。

こういったことがあるからゴブリンスレイヤーは魔劍を使わないのだ。もちろんこの街で死んだ冒険者を責めようとは思わないが。

鎧の隙間に強引に刃をねじ込もうにも、あの剣で斬りかかられたら技量にかかわらず致命傷を喰らう。素手で組み伏せることも出来なくは無いが、骰子の出目は厳しいだろう。

その逡巡を読み取ったのか、考え無しなのか、小鬼騎士が駆けだした。考えている時間はない。

「ボクがやります」

カノンを抜いた旅人が前に出た。

下手に鎧に当てると跳弾が怖い。首元まで覆われているので即死も狙えない。ならば。

轟音と共に鉛玉が発射される。命中したのは、熱劍をもつ右腕だ。狙うのは甲冑に覆われていない布鎧の部分だ。

鎧の隙間から入り込んだ鉛玉は恐るべき破壊力をもってして腕をちぎり飛ばした。熱劍は腕と一緒に飛び、壁に刺さって熱を失った。

「手に持っている間だけ効果を發揮するようですな」

「よくやった」

旅人を労うと、ゴブリンスレイヤーが駆けた。痛みにも喚きながら床を転がる小鬼騎士の、兜を掴み、首を捻り折る。

「これで八」

「オルクボルグも少し野蛮になってきたわね、なんというか、戦い方が」

「鎧兜の隙間に刃をねじ込むのは手間だからな」

「力で解決するなら力を行使すべきですなあ」

蜥蜴僧侶がニヤリと笑い、小鬼騎士の落とした熱劍を拾った。

柄をしっかりと握ると、銀色の刃が赤熱する。

「しばし借りることにしましょう」

蜥蜴僧侶が鞘も拾って納剣し、ゴブリンスレイヤーが適当な手斧を拾った。

「プラスチック爆薬を使えば楽だったろうな」

そういうゴブリンスレイヤーの口調は何処か名残惜しさが含まれている。

「使わなくて良いなら使っちゃダメだからね？　ここ崩れるかもしれないし！」

「かみきり丸は小鬼を殺す手段についてはすぐに覚えるのう」

「使い方も考えますしね……」

女神官は氷菓子の作り方でトロールを倒した時のことを思い出した。

突入前の旅人の案では、この庁舎に爆薬を大量に仕掛け、ゴブリンが集まったところで吹き飛ばすというものだった。

……賛成したのはゴブリンスレイヤーだけだったが。

一党は再び進み始めた。

と言っても、四階にはほとんど敵はいなかった。となると、必然的に最上階である五階に集まっていることになる。

この庁舎の五階は、展望台だ。三階と五階、一階のみが一般開放されているらしく、冒険者でなくても街を一望できると言うわけだ。ドアを開けた正面は拓けているので、こちらからの不意打ちは望めないはずである。

「行くぞ」

「あ、その前に」

そう切り出したのは旅人だ。

女神官に言った。

「展望台に出て直ぐに壁を張ってくれませんか。おそらく、ゴブリン達はボクらの姿が見えた瞬間に撃ってきます」

「！　わかりました。」

ゴブリンスレイヤー、女神官、旅人の三人の前衛で突入すること

になった。

女神官が錫杖を構え、地母神へ祈りを捧げる。

「へいと慈悲深き地母神よ、か弱き我らを、どうか大地の力でお守りください」

三人で顔を見合わせた。

旅人が三本指を立て、折っていく。

二本。

一本。

旅人がドアを蹴破って展望台に出たのと、プロテクション「聖壁」が展開されたのは同時だった。

「パースエイダー2、槍2、剣5、術無し！」

ゴブリンスレイヤーが敵の数を確認したと同時に、大柄なゴブリン二体が連射型パースエイダーの引き金を引いた。

一分で200発殺到する鋼鉄の牙が、冒険者達に襲いかかる。

だが、どうだ。地母神への敬虔な祈りによつてもたらされた聖なる壁は、弾丸の雨あられを全て弾いているのではないか。

しかし連射には限界が来る。壁を維持する精神力もだ。さて、結果は。

「はあっ、はあっ、はっ……」

「GGGAAABB」

女神官が息も絶え絶えに膝をついた。だが、二両合わせて90発もの猛撃を防いでみせた。

ゴブリン銃手二匹は苛立ちながらも弾倉を取り替える。

その隙をゴブリンスレイヤーと旅人が逃すはずもなかった。

カノンを撃ち、剣を投げる。

弾が切れればただの文鎮。文鎮持ち二匹はあつという間に死体に成り果てた。

「これで丸ね」

妖精弓手が矢を射って、剣をもってうろうろしていた最後のゴブ

リンが死んだ。展望台、制圧完了。

蜥蜴僧侶とパースエイダーを破壊し終わると、ゴブリンスレイヤーが言った。

「脱出をする。窓際を集まれ」

「ああ、またあれをやるのね」

死体から矢を回収した妖精弓手が、耳を倒してげんなりと言った。

「二階からの脱出はすでに不可能だ。あれしかあるまい」

ゴブリンスレイヤーは問題に思っていないようだ。

「上手くいけますかね？」

旅人が言った。

「緊張しとるんか」

鉱人道士の質問に旅人は「少しは」と答えた。

「ま、そこは銀等級の腕前を信じてもらうしかねえな」

鉱人道士は酒を一口飲み、口を湿らせた。

「鱗の！ 準備は出来てっか!?!」

「こちらはすでにばっちりと」

「んじゃ行くか!」

ゴブリンスレイヤー一党は、展望台から飛び出した。

「もうこれやだあああああああ!」

「きやあああああああああ!」

妖精弓手と女神官の悲鳴の中、鉱人道士が複雑な呪印を結ぶ。

「へ土精や土精、バケツを降ろせ、ゆっくり降ろせ、おろして置い

てけ!」

フォーリング・コントロール

へ降 下 の術は鉱人道士の呪言に反応し、落下する冒険者

達を重力の縛りを緩和した。

ゆっくりと降下をする中で旅人が啞然とした様子で言った。

「本当に、ゆっくり降りてる……」

「はっはっは、魔術と言うのは偉大ですなあ」

蜥蜴僧侶楽しそうなのは先祖に鳥類の血のせいか。

「でも、下にゴブリンが……!」

女神官が危惧したとおり、下には街から集まってきたゴブリンがわらわらとこちらを見上げている。このままでは着地狩りから逃げられない。

だが、それでも蜥蜴僧侶は落ち着いていた。

「それなら、直ぐに迎えが来ますのでご安心を」

呼応するように、庁舎の一階からゴブリンを撥ねながら装甲車が飛び出した。

灰色のボディに赤いペイントを施しながら装甲車は一党の落下に合わせて近づいてくる。

装甲車はそのまま、一党の落下先に停車した。

「だ、誰が運転してるんですか?」

女神官のその疑問の答えは、ハッチからサブマシンガンを抱えてハッチから身を出した骨の戦士が教えてくれた。

あの軽機関銃は装甲車の中にあつたものか。

ドラゴントウスウォリアー
「竜 牙 兵!」

竜牙兵は、サブマシンガンを構えると、少しずつ近づいてくるゴブリンどもを発砲でもって蹴散らした。その間に一党は装甲車の上部に着地し、中に入っていく。

「竜牙兵って運転もパースエイダーも使えるのね……」

「出るときに少し教えただけなんですけど、ここまで出来るとは思いませんでした。」

「戦士とは賢さもなくてはな。力だけでは蛮族と変わりなし」

シートベルトを締めながら、そんなやりとりを交わす冒険者達。

「このまま街を出ますか?」

旅人の質問に対し、「いや」とゴブリンスレイヤーは否定した。
「数が数だ。一度退いたら、何処に行くかわからん。」

「ゴブリンを皆殺しにする」

石の街攻略③

悪魔の手は、誰も居ない支部室で目を覚ました。
凍える様に寒い。傷口だけが熱く感じる。

だが、生きている。悪魔に体を作り替えた自分の体は、人間の時よりも頑丈に出来ているらしい。

鉛の詰まった体を持ち上げ、窓から外を見た。

緑の波が、気色悪く蠢いていた。

ゴブリンなら見張り以外のほとんどが眠る昼時だったが、そのときは街のほとんどのゴブリンが起きていた。

それもそのはず、街の中央から例の鉄の礫を飛ばすからくりの音が何度も聞こえたからだ。

そして、庁舎から呻りを上げて飛び出す鉄の箱を見たとき、ゴブリン達の寝ぼけた意識は覚醒し、一つ同じ事を考えた。

即ち、「あれを止めて中身を引っ張り出してやろう。」

仲間の一匹は、あの中に冒険者が入っていくのを見た奴がいた。
女もいたと言う。奪うほかあるまい。

街の人間はすでに食べたり犯したり遊んだり、とつくに使果たしてしまった。生きているものはいない。

武器にせよ冒険者にせよ、新品の方が良いに決まっている。だが、数は少ない。これまでにない大所帯となったこの規模で、女が一人二人居たところで全員に回る事は無い。

ならば、早い者勝ちだ。

そんなわけで、道いつぱいのゴブリンが装甲車めがけて走っていた。

鉄の箱はかなり速いが、見える距離だ。

街の端が見えてきたところで、装甲車は停止した。

どうして止まったのかはわからなかったが、今がチャンスだと言うことはわかった。

各々の武器と薄汚い欲望を抱え、数多のゴブリンが装甲車に駆け

る。

そして、

その多くが、銃弾によって挽肉になった。

「ゴブリンを一方向からのみ来るように仕向け、これを塵殺する。」

これが、ゴブリンスレイヤーの作戦だった。

とは言っても、身一つで肉弾戦で迎え撃つのは不可能だ。道一本にしてもそれなりの広さがある。

ゴブリンの一番恐ろしい部分は数だ。前衛である蜥蜴僧侶とゴブリンスレイヤーが体を張ったところで、直ぐに崩されてしまうだろう。

だが、装甲車の上には全自動式連射パースエイダーがあった。筒が回転しながら毎分600発弾を撃つそれがゴブリンによって破壊されなかったのは奇跡に近い。

もちろん、車内に弾がないというトラブルもある。無ければ一度街に戻り、冒険者を集めて再び攻めるという段取りだったのだが。弾はあった。予備のパースエイダーも。自分たちの状態も良かった。

だから、殺す事にした。

旅人がパースエイダーを連射し、ゴブリンを殺しながら群れを止めめる。

妖精弓手と竜牙兵が矢を射かけて混乱を起こす。

そして動きが鈍った所に、ゴブリンスレイヤー、蜥蜴僧侶、鋏人道士が突っ込む。

女神官は、タイミングを計って壁を張り、動きを止める。彼らは段取りを決め、配置を確認してから庁舎に突撃した。

そして、今。

装甲車が動きを止め、冒険者達が持ち場につく。

「来るわね」

「来ますね」

投石紐を取りだし、石を巻き付けて言った

民家の上に登った妖精弓手が言った。矢筒には街路樹から分けて貰った矢が詰まっている。

傍らには一体の竜牙兵、小型連射式パースエイダーと換えの弾倉、民家で見つけた狩猟用石弓クロスボウと矢を持っている。

「来るのう」

「来ますなあ」

装甲車の裏で鉦人道士が酒を呷り、手斧を担いだ。

蜥蜴僧侶は鞘から熱剣を抜いた。たちまち刀身が赤熱する。

ゴブリンスレイヤーは、先ほど庁舎のゴブリンから奪った、剣の具合を確かめた。

「来るな」

旅人は、車上のパースエイダーの準備を終えた。かなり重たい弾倉なので、リロードには時間が掛かるだろう。

「もう来るかな」

旅人は、装甲車の中に落ちていた耳当てを装着すると、パースエイダーのグリップを握り直した。引き金に指はかけず、ピンと伸ばす。

そして、ゴブリンが見えてきた。

ゴブリンが来る。

ゴブリンが来る。

ゴブリンが来る。

道をいっぱい埋める緑の波。

旅人は引き金を引いた。

ぶうううううううううううううううううー

街の中に破裂音が轟いた。

連続してパースエイダーが発砲する音だが、連射速度の速さ故に

繋がって聞こえる。

パースエイダーの排出口から空薬莖がいくつも飛び出して、キラキラと光を反射した。

あまりにも密な弾幕はゴブリンどもを打ち抜くと言うより、削り取って殺していった。

「あんまり撃っちゃだめだ」

この装甲車には、弾が千発も無かった。

熱くなった砲を取り替える、予備のバレルももう一つしかないので、ずつと撃ち続けることは出来ない。一度道路を右から左に掃くようにパースエイダーを動かすと、旅人は一度撃つのを止めた。

だが、パースエイダーの衝撃力、目の前で形をなくす仲間、これがわかってしまったらゴブリンは動く事が出来ない。

ゴブリンとは自分本位な生き物だ。群れが蹂躪されることに怒るが、自分が死ぬくらいなら仲間を差し出す。

あの砲が向けられたら死ぬ。

「今」

そう考えた第二陣のゴブリン達は逃げようとして、妖精弓手達の

矢に襲われた。

先ほどとは違って密度こそないものの、頭蓋を貫かれて死ぬ仲間
の姿は欠片になった死体よりも死を連想させた。

阿鼻叫喚の地獄の有様だったが、人を犯し、喰う祈らぬ者ノンプレイヤーに同情
の余地などない。

ゴブリンの動きが緩慢になった。

そこに、三人が武器を片手に突撃した。

「イイイイイイアアアアアアアアアア!!!」

一番槍、雄叫びとともに蜥蜴僧侶が斬りかかった。

熱剣によってバターの様にゴブリンが斬られ、ドラゴンテイル竜の尾によって
ゴブリンが吹っ飛ばされる。偉大な竜の子孫は、その膂力でもって殺
戮をまき散らしていた。

ゴブリンスレイヤーが剣を投げ、盾で打ちのめし、金槌を奪って、
頭蓋を砕く。こちらは確実に、作業めいてゴブリンを殺害していく。

鉱人道士は手斧を振るってゴブリンを叩つ斬っていた。リーチ
こそ無いが、武器の扱いでゴブリンごときにかなわぬはずが無い。

ある程度削ったところで、新たなゴブリンの群れがこちらに近づ
くのが見えた。

「二度退くぞー!」

ゴブリンスレイヤーが叫び、二人はそれぞれ民家に飛び込んだ。
ゴブリンスレイヤーが腕を振って旅人に合図を送り、彼も民家に入
る。

「よし」

旅人は再びパースエイダーを握り直した。

ゴブリンの群れがやってくる。

ゴブリンの群れに、再び篠突く弾丸の雨が降り注いだ。

ゴブリン達は再び弾丸によって削られ、矢によって動きを防が

れ、剣戟にて死んでいった。

ゴブリンスレイヤーが再び合図。射線を延ばせ。

旅人は全自動式連射パースエイダーの安全装置をかけると、装甲車の運転席に座ってエンジンをかけた。

ゆっくりと前進し、中央へ進む。

合わせて冒険者達も前進。

頃合いを見計らって再び射撃を開始。同じようにゴブリンどもを削ってゆく。

撃って射って斬って退いて撃って射って斬って退いて撃って……。

ゴブリンの数は明らかに減っている。

しかし、一党の体力が減っているのも事実だった。

民家の上にゴブリンが登ってきたので、妖精弓手達は応戦した。

竜牙兵の小型連射パースエイダーの弾が尽き、ゴブリンに足を掴まれて地べたに叩きつけられた。

登ってくるゴブリンどもを女神官は錫杖で必死にたたき落とし、妖精弓手は最後の矢を射る。

旅人が撃っていたパースエイダーの砲身は煤で真っ黒になり、陽炎を揺らめかせている。

全自動式連射パースエイダーはとつくに弾が尽きたので、フルートで狙撃を繰り返していた。

後ろから奇襲を狙うゴブリンがいたので、カノンを抜いて発砲。全て殺したときに、弾が尽きた。素早い手つきで弾倉を取り替える。

フルートの残り弾数ゼロ。ポーチには、森の人の弾倉が三本、カノンの空のシリンダーが一つ。残り弾数、僅か。

蜥蜴僧侶の熱剣は効果を失い、とうの昔にぶち折れた。先ほど

拾った槍も穂先が取れたので、放り捨てる。

ゴブリンスレイヤーの腕にくくりつけられた革の円盾は攻撃を受けすぎてズタズタになり、紐が切れて落ちた。

鉋人道士が今持っているのは、片方の爪が折れたピッケルだ。触媒の詰まった鞆は何処かに行った様だ。

道は血で真っ赤に染まり、冒険者達も赤黒く染まっていた。

血臭と硝煙の臭いで充満しており、慣れない者が嗅いだら吐いていたことだろう。

ゴブリンの数は十分の一以下にまで減っていたが、まだ残っている。

疲労困憊、满身創痕といった様子だが、冒険者達の目は死んでいない。

ゴブリン達は、恐怖を感じていた。

道を埋め尽くすほどいた同胞達は、肉片になり、首になり、串刺しになった。

たった六人ぼっちの冒険者に、おれたちの大群は蹂躪された。

数で流せばおして流せるはずだったのに。何故、何故、何故。奴らは一体何者なんだ。

群れを打ちのめされた怒りよりも、冒険者達への恐怖が勝った。

ゴブリンは我先にとゴブリンスレイヤー達とは反対側に走って逃げていく。

逃げるゴブリンの姿を見て、ゴブリンスレイヤーは諸刃の片手剣を拾った。

近くで足音がしたので顔を上げると、仲間達がそこに居た。

誰も彼も消耗して、万全の者などいない。ゴブリンスレイヤーが取った選択は、

「今日は、もう退くべきだろう」

「そりゃそーでしょ。文字通り刀折れ矢尽きるってやつね。もう無理無理」

妖精弓手は手をヒラヒラと振って言った。

妖精弓手の軽口に、一党に笑いが起きる。

かくして一党は石の街のゴブリンを撃退した。

生き残りこそいるものの、九割を殺したとあれば大金星といえるだろう。

警戒を怠らずとも和やかな空気が流れた。

一党が馬車に向かおうと中央に歩き出したところで、女神官は見た。

地面に広がるゴブリンの赤黒い血が、庁舎に向かって進み始めるのを。

悪魔デーモンハンドの手は、全身の銃創から血を噴き出しながら、地面に印を記していた。

「我らが魔神王デーモンロードよ、覚知神よ……。我が身、我が軍勢、贄の血を捧げ、祈り奉る……。どうかあの者たちを滅ぼし、世界を滅ぼす使いをお恵みください……。」

ゴブリンのいる国　　GOBLIN　SLAYER

！

「皆さん、足下を見てください！」

女神官が叫んだ。

地面は、奇怪な現象が起きていた。

ゴブリンから流れた血は、庁舎に向かって流れていく。

先ほどまで石畳を真っ赤に染めていた血は全て、一つのことを持つ生き物の様に、乱れること無く真っ直ぐに奔る。

それだけでは無い。ゴブリンの死体も、血の山河に取り込まれてゆくのだ。明らかに沈むほどの深さはないと言うのに。

首から剣の柄を生やしたゴブリンも、頭蓋骨が陥没したゴブリンも、首だけになったゴブリンも、首の無くなったゴブリンも。

遍く死体が血の河に飲まれ、流れていく。

異様な光景だった。

「何が起きてんのよ、これ！」

「儂にわかるかい！　お前さんこそ二千年の人生で見たことないんか！」

「初めて見るわよこんなの！」

旅人がそっと河に触れてみるが、ただ血の流れを感じるだけだ。

「どうして死体が沈むんだろう。すごいな、これ……」

流れる血は全て庁舎の壁を上っていく。

展望台に集まっているようだ。

そして、グチャリと。全員が確かにその音を聞いた。粘着質で、水気を含んだような不快な音を。

「何の、音だ？」

ゴブリンスレイヤーが不意に口にしたその言葉は、妖精弓手達の

思いを代弁していた。

音の元は庁舎の屋上、展望台。

悪魔の手は、自分の体から止めどなく流れゆく血など意に介さず、血の河を見て狂喜していた。

「我が祈りは神に届いた……！　〈召喚^{サモン}〉の祈りによって破壊神は降りてくる！　この者によって四方世界の生物も文明も、何も残らない……」

そこまで言ったところで、大量の吐血によって言葉を失い、仰向けに倒れた。

自分の体が自分の血の中に沈むのがわかると、満面の笑みを浮かべて、流れに身を任せた。

展望台で、それはゆっくりと起き上がった。

生き物だ。

丸みを帯びた型は頭のような。折れ曲がった柱は腕のような。

西日でハッキリと表面を見ることが出来ないが、緑の表皮はぬめりとした粘液で覆われていて、気色悪くテカっている。

謎の生物の頭部と思しき球体の、真っ黒な穴がこちらをみた。

「こちらを、見たんでしょっか……？」

女神官が震える声で言った。

果たしてゴブリンスレイヤー達を狙って動いたのか、何も考えずに動いたのか、そもそもゴブリンスレイヤー達を認識出来ているのか。

なににせよ、それは腕を大きく振った。展望台を思い切り押し、跳躍。

ゴブリンスレイヤー達の方角に飛んだものの、直ぐに重力に捕

まっつて地面に落ちた。

顔面から地面に激突し、血しぶきをまき散らす。

グツシャア！、という肉が破裂する音が石の街に響き渡る。

「ひっ！」

「むう……」

女神官が小さく悲鳴をあげ、蜥蜴僧侶が鼻を突いた悪臭に呻いた。

落下したそれは、人間の頭に極端に短い首。首から生える一本の腕で構築されていた。

頭の大きさも腕の太さも、一階ほどの大きさ。

表皮は緑色。口から覗く黄色い乱ぐい歯は嫌でも生理的嫌悪感をかき立てる。

落下の衝撃で割れた皮膚から赤い体液を噴き出し、原型を崩していた。

「何だあれは」

「デカイ頭とデカイ腕。巨人のなり損ないってどこか？ まあ、味方ってこたあねえわな」

「確かに、謎の病原菌に襲われた街。埋め尽くすほどのゴブリンを殺して、最後のこれが味方のはずがありませんな。何処の何奴か知らなんだが」

「どうする？ 射る？ 届くけど」

「弓で倒せるのでしょうか……。落下の衝撃で息絶えてませんか？」

「指が動いているので生きてますよ、あれ」

旅人の言うとおおり、ソレは落下で絶命すること無く生存していた。

ひび割れた皮膚も端から繋がりはじめ、修復を進めている。

否、それだけでない。

「というか、体積が増えてませんか……？」

女神官の分析は正しかった。腕はもう一本、短いながらも生え始め、首から下もグジュグジュと水っぽい音を立てて増えつつある。

「直に、成体になると考えるべきか。……どう見る」と蜥蜴僧侶にゴブリンスレイヤーは問うた。

「ふむ。我々の任務は、この街を滅ぼした首魁の調査です。首魁は死に、ゴブリンも殺した。必殺の必要は無い。退くべきかと」

「今すぐに倒さなければならぬ理由は無い、か」
退き、後に冒険者の一団か軍を呼ぶ。
おそらくこれが全員生き残れる選択肢だ。

そう結論づけようとしたところで、「そうでもないかもしれません」と旅人が切り出した。

「あの巨人ですが、これから成長すると、倒せなくなるかもしれません」
「ど、どうしてですか？」

「あの巨人はさっきまで軟体動物のように潰れた形をしていましたが、今はそのような部分が無くなっていて、形を保っています。つまり、ある程度の再生が出来て、かつ自重に潰されにくらい堅くなったのかもしれませんが」

そう言っただけ旅人は、森の人を向けた。レーザーポインタの赤い点
が、肩にぽつんと浮かび上がった。

発砲。乾いた炸裂音がして、二十二口径の弾丸が肩に……刺さらなかった。確かに命中した弾丸は肉に埋まることも無くポトリと地面に落ちた。

「弾いた?!」

「すでに大分堅くなつとるな……」

鉦人道士が呻いた。

銃弾を喰らって気分が悪くなったか、無理矢理起こそうとする手を払うように巨人はうつ伏せのまま腕を無造作に振った。

その動きは赤子そのものだったが、その一振りで頑強さが売りの石の民家は崩れ落ちた。

一党の脳裏に、最悪の想像がよぎった。

この場で放置し、成長を止めなかった場合、剣でも術でも殺せない怪物になるのではないか？

「ど、どうしましょう……。」

女神官が問うた。その顔には絶望が陰っている。

「爆薬を……仕掛ければ吹き飛ばせるか？」

ゴブリンスレイヤーは旅人に問うた。

旅人は首を横に振った。

「あのサイズをプラスチック爆薬で外から吹き飛ばすのは難しいと思います。体内で起爆すれば吹き飛ばせると思いますけど……」

それはつまり、あの巨人に近づかねばならないと言うことだ。

設置しに行くまで奴が攻撃してこない保証は？ 寝転んだだけで圧殺されるかもしれないのに。

全員が、ゴブリンスレイヤーを見た。ゴブリンスレイヤーは、全員を見た。

資源は乏しく、精も根も尽きかけている。

今もなお巨人は成長を続けていて、今近くに居るのは自分たちだけ。

どうする。

敵は巨人。魔神の手でも、川を堰き止める者でも、闇人でも、竜でもない。

どうする。

才能も知恵も技術もない。根性はある。それで？
どうする。

自分のポケットの中身を必死にかき分ける。
何が最善か。何が最適か。

そのとき、ゴブリンスレイヤーは見た。

巨人が大きく動き出したのだ。

先ほど生えてきた腕で地面に突っ張り、もう片方の腕で近くの民家を掴む。

ビキビキと石づくりの民家をヒビ割らせながら巨人は姿勢を持ち上げた。

つまり、上半身は自重で潰れないほど頑強になったと言うことだ。おそらく、一党で一番の切れ味をもつ竜牙刀でも斬れなくなっただろう。

だが、そんな事よりも、ゴブリンスレイヤーは大事なものを見つけた

その巨人。影に隠れて見えなかったが、上体を起こしたことでそれが露わになった。

緑色の皮膚。耳まで裂けた口。申し訳程度に生えた体毛。

あれは、あいつは。

「ゴブリン、か？」

そのとき、彼の思考を埋めていた負荷は全て消え去り、たった一つだけが認識した事実が残った。

なんだ。いつものことか。

ゴブリンスレイヤーは、仲間達を見ると、はっきりと、決断的に言った。

「手は、ある。奴は、この場で殺す。」

彼はゴブリンスレイヤー。いくら大きさが変わろうが、ゴブリン

を生かして逃がすなどあり得ないのだ。

小鬼巨人は、朦朧とした思考の中であらゆる情報が錯綜していた。

世界を滅ぼせ。祈る者を殺せ。四方世界を荒野に変えろ。

激痛が常に全身を奔り、思考は混濁し、まともな事など考えられない。

だが、荒れ狂う意識の中で、たった一つ不動のものがあつた。すなわち、

冒険者を喰らい、犯したい。

あいつらはいつもおれたちを蹂躪し、美味い汁を啜っている。一体何をしたというんだ。

許せない。殺さなくては。生きていたことを後悔させ、尊厳を塵になるまで蹂躪するのだ。

そこで。

「へ偉大なりし暴君竜よ、白亜の園に君臨せし、その威光を借り受けるる〜！」

〈竜 吼〉。偉大な竜の圧力を纏うその咆吼は、小鬼巨人を注目させた。

巨人となつても中身はゴブリン。偉大な竜の覇気を浴びて、小鬼巨人はたじろいだ。重心が僅かに後ろに動く。

その機会をゴブリンスレイヤーは見逃さない。雑囊からそれを取り出すと、民家の屋根の上から小鬼巨人に向かって投げつけた。

小鬼巨人は、目の辺りに極めて小さな衝撃を感じた。直ぐに割れたらしい。そんなものが効くはず……。

「GOAABB?! GOA A A A A A!!」

「唐辛子や虫の死骸を混ぜた、催涙弾だ」

小鬼巨人は、目鼻を襲う激痛にもだえ苦しんだ。

如何に体型が大きくなっても、基本的な器官は変わらない。粘膜を激しく刺激する催涙弾は、小鬼巨人に効果覿面だった。

小鬼巨人は痛みに耐えきれず、仰向けに転がった。

大質量の物体が倒れた事によって、塵が巻き上げられる。蜥蜴僧侶は素早く待避。

上手く呼吸が出来ない。

小鬼巨人が口を開けたところで、

「こいつでもくらいなさいー!」

ゴブリンスレイヤーの向かいの民家の屋上にいた妖精弓手の追撃が掛かった。

喉に向けて放たれた一本の矢。街路樹にお願いして分けて貰った最後の一矢。喉の奥に刺さった。いかな強者といえど、喉に喰らえば致命傷となる。それがゴブリンならなおさらだ。

目鼻を刺激され、喉奥を射られた小鬼巨人は仰向けになってもがいていた。矢を取り出そうと、口を大きく開けて咳き込む。

腕を振るう度に石づくりの民家は破壊されていく。だが、痛みは消えない。

目を掻け。小鬼巨人が顔に向かって腕を動かそうとしたとき。そのときであった。

「へいと慈悲深き地母神よ、か弱き我らを、どうか大地の力でお守りください!」

妖精弓手の横で、女神官が錫杖を掲げて祈った。〈聖壁〉は小鬼巨人の口をつつかえるように口内に展開された。光の壁は上顎と下顎を押さえ込み、口は開いたまま、閉じることが出来なくなる。信者を守るべく展開される壁は、今は巨人の口のつつかえ棒だ。

これは攻撃じゃ無いです。拘束してるだけ……。

女神官は心の片隅でちよっぴり言い訳した。

「GGOOOO? GAABBAAAA!」

「いつ、今です!」

「頼む!」

「ほいきた任せい!」

応じたのはやはりゴブリンスレイヤーと同じ屋上で待ち構えていた鉱人道士だ。先ほど集めた砂を宙にまく。土精ノームは大地と関わりある限りどこにでもいるものだ。

「へ仕事だ仕事、土精ども。砂粒一粒、転がり廻せば石となる!」

〈石 弾〉の魔術。

粘土は回転しながら質量を増し、大きな塊になる。

「旅の、やれ!」

「はい!」

旅人は、応じてナツプザックからプラスチック爆薬を取り出した。

五キロの粘土状のそれを延ばして回転の止まった〈石 弾〉に貼り付けると、旅人はボールペン状の電気信管を埋め込んだ。念のため、四本ほど埋め込む。時限式が二本、無線式が二本。

「くつつくのか、それは」

「プラスチック爆薬自体くつきやすいんですけど」

「ニカワも塗ったからな。べつとべとじやい、べつとべと」

「ぶち込むぞ!」

ストリンブラスト ストリンブラスト パージョン パージョン 弾 大玉拵え爆薬合わせは、口を大きく開けた小鬼巨人の

口にたたき込まれた。

顎が外れんばかりにぶち込まれた〈石弾〉は小鬼巨人の口を開けたまま、瓶の口のコルクの様に塞いでいる。

旅人は、カノンを抜くと、三発連続して撃った。事前に決めておいた合図だ。

爆薬セット完了。速やかに距離を置いて待避し、地面に伏せて耳を塞いで口を開けて待機せよ。

最後の仕掛け役である鉋人道士と旅人も急いで移動し、小鬼巨人から三軒離れた民家に飛び込んだ。

「爆破します。」

伏せた旅人はそう言って、無線機のスイッチを押した。

無線機からの信号を受け、電気信管が化学反応を起こして粘土状の爆薬に連鎖、起爆。

一瞬にして空気を何百倍、何千倍にも膨張させた五キロのプラスチック爆薬は、小鬼巨人の頭部どころか上半身も巻き添えにしながらかき飛ばした。

恐るべき爆風は周囲の民家の窓ガラスも粉碎。隠れていた冒険者に降りそそぐ。

轟音が街を一気に走り抜け、その後に静寂が訪れた。

石の街南通り。庁舎近くにて。

頭部と胸の何割かを失った小鬼巨人が、血を噴き出しながらゆつくりと倒れた。

代謝能力を失った小鬼巨人は、心臓の鼓動を完璧に止め、死んでいた。

「結局ゴブリン退治だったのよ」

冒険者ギルドにて。

ため息をついて妖精弓手は檸檬水をぐいと呷った。

卓の正面の牛飼娘は、苦笑しながら話を聞く。

「彼は昨日帰ると直ぐに倒れる様に寝ちやったから」

「まあ、そりゃ疲れるわよ。何度も街を走り回ったからね」

それは妖精弓手も同じのはずだが……。一晩ぐっすり眠ればけろつと直るのは森人らしいと言うべきか。

「しかも疲れた体を引つ張つて馬車に戻ったらモトラドが『おつかれ』ですって。気が抜けちゃったわよ」

「そうなんだ。ところで、そのモトラドさん達は？」

「報酬持って燃える水買いに行つたわ」

「お願いします」

「お久しぶりー」

「ふん、やつときおつたか」

街の端。錬金術師の工房に旅人とモトラドが来ていた。

工房に所狭しと並ぶ水瓶フラスコや試験管と言つた実験道具の奥に座る老

錬金術師は新聞を放ると鼻を鳴らした。

「これが冒険記録アドベンチャーログで、これが小切手。ギルドの受付にお金は預けてあります」

錬金術師は眼鏡を持ち上げて目を近づける。なるほど、確かに証明する判も押してある。

「ちよつと待つとれ」

二枚の紙を卓に放ると、錬金術師は店の奥に引つ込んだ。

「今更だけど、モトラドのエンジンの仕組みとかを売ればいくらかになつたかな？」

「それは意味ないと思うよ」

旅人の提案をモトラドは否定した。

「どうして？」

「燃料の金額を考へてみて。燃料がそんなに高価つてことは、それほど貴重つてこと。この国でモトラドを作つても燃料が高すぎて乗つてられないよ。石の街の装甲車とかも同じじゃない？」

「ははあ、なるほど。でも、研究者ならとりあえず技術は見ておきたいんじゃない？」

「そんなものどつくに知つとるわい」

台車に燃料の入った一斗缶を乗せて錬金術師が戻ってきた。

「知っている？」

旅人の問いに錬金術師はああ、と返した。

「数十年前にな。儂が都で師の元で研究者をやっていた時だ。黄色くて小さい馬車に乗った二人組がやってきてな。そのときに見せてもらった。」

「……それでもしかして」

「……かもね」

「若い女と男の二人組は、お前さんのように都で冒険者登録をして、街を襲う上位悪魔の群れを退治して話題になつとったよ。残念ながら銀行の財宝は悪魔どもによつて幾ばくか奪われてしまったらしいが。おお、そのときにパースエイダーとやらも見せてもらった。お前さんの持つている奴と同じ形だったような……。何か知っておるか？」

「いえ、何も」

旅人はゆっくりと首を横に振った。

燃料をモトラドに詰め、残りを燃料缶に移し替えると、旅人達は冒険者ギルドに戻った。

自在扉を開けると、いつも通りのその外れ。彼等の定位置にゴブリンスレイヤー一党がそろっていた。今回は牛飼娘も一緒だ。

妖精弓手が手を振って呼ぶ。

「燃える水は買えた？」

「ええ、しつかりと」

「次に何処行くか決まっているの？」

「とりあえず都の方について観光して、その後魔術学院？に行つて元の世界に帰る手段を探そうと思います。」

長椅子にかけた女神官が問うた。

「いつ出発するのですか？」

「このあと食事を終えたら、直ぐに。さつき必要な物は全て買いそろえましたから」

「それを早く言いなさいよ！」

妖精弓手が驚いた口調で言った。

「旅の出発となれば祝うもんでしょ！ 注文おねがい！」

「つたく、森人は祭りみたいな騒ぎが好きだの」

「そういう術士殿も酒を用意しているようですが」

「これはいつもの。今飲む酒はこれから注文するんじゃない」

鉦人道士と蜥蜴僧侶はそう言って目を合わせると笑った。

「どうしましょう。何も用意してない……」

困った様子の女神官に、ゴブリンスレイヤーは「用意」とオウム返しに言った。

「とは」

「折角一党を組んでいたのですから、何か贈り物くらいは用意した方が」

「まあ、彼はそういうのあんまりやったこと無いから」

女神官は焦り、牛飼娘は呆れたように笑った。

それはともかく、料理は来た。昼間といえど宴の始まりに変わりは無い。

「それでは、私たちの帰還と、石の街の復興と、旅人さんの旅に！」
乾杯の音頭とともに、ジョッキがガツガツとぶつかった。

テーブルに所狭しと並ぶご馳走を、みんなで分けて頬張っていく。
獣人女給に呼ばれて何故か牛飼娘も手伝う事になってエプロンつ

けて厨房に乱入。

たちまち酒場にシチューの甘い香りが漂い始める。

「そういえば、街で食べてた携帯食料ですけど。」

「はい」

「あれって美味しいんですか？」

女神官の好奇心に、旅人は携帯食料を一本上げることと答えた。

一部始終を見ていたゴブリンスレイヤー達にも分けて、一斉にパクリ。

全員が微妙な顔をするなか、ゴブリンスレイヤーが平気そうに平らげたので場に笑いが起こる。

昼下がりに急遽始まった宴会は大いに盛り上がったのだった。

「それでは、ボク達はこれで。」

街の外れに、皆が集まっていた。

「むこうについたら手紙でもおくってよ」

そう言つて妖精弓手は葉に包まれた薄く小さなパンを取り出した。

「森人の保存食。森の人のよしみもあるし」

「達者でな、旅の。こいつは餞別よ」

鉱人道士はそう言つて布に包まれた飾りを一つ手渡した。鳥を模倣モチワフとした物だが緻密な細工が施されており、業物である事が伺える。

「鉄と縁のある鉱人の飾りよ。自分でつけるなり、向こうの街やら国やらで売るなり好きにしたらええ。」

「拙僧は、そうですね。旅の安全を祈らせて頂きましょう」

蜥蜴僧侶はそう言うのと両手を合わせて印を結んだ。

「白亜を歩し偉大な羊よ、永久に語られる闘争の功、その一端なりし

へ彼の者を導き給う」

武勲と功、名誉ある死を祈る物だが、冒険も旅も大差はない。

「神官殿も、祈つては如何ですか？」

「で、では。交易神ではないですが……。慈悲深き地母神よ、旅行く者に、加護と幸がありますように」

「ありがとうございます。ありがたくいただきます。祈りも、心強いです」

「でもやっぱ何か実物を」

旅人がモトラドのタンクを殴った。

「イテ」

妖精弓手はゴブリンスレイヤーの小脇を突いた。

「ほら、オルクボルグも」

「俺か」

ゴブリンスレイヤーはそう言って、顎に手を当てた。

そして、

「これならどうだ。」

雑囊から一つ指輪を取り出すと、旅人に渡した。

「これは？」

「水中呼吸の指輪だ。つけていると、水の中でも息が出来る。長時間は持たないが」

「えっ」

驚いたのは女神官だ。蜥蜴僧侶と鉦人道士は笑いをこらえている。意地悪なことだ。

「旅人さんって女性ですよね」

「そのようだな」

「えっ！」

ゴブリンスレイヤーはいたって普通に答えた。まるで動揺していない。これは指輪の意味もわかってないな、と銀等級冒険者達は思った。

その情報に驚いたのは牛飼娘だ。さっきまで微笑ましく見ていた牛飼娘は半眼を作ってゴブリンスレイヤーを軽く睨む。

「へー……ほー……ふーん」

「どうかしたか」

「いや、まあ、別に」

わかってないんだろ。変にアプローチするのは止め、はあ、とため息をついた。

「苦労するねー」

「まあ、ゴブリンスレイヤーさんですから」

モトラドが茶々を入れ、女神官が苦笑しながら返した。だが、その

失言をモトラドは逃さない。

「あれ？ てつきり牧場のお姉さんが……ああ、なるほど」

「えっと、その……ノーコメントで」

女神官が手をワタワタと振ってごまかした。

「では、ボクはそろそろ出発しようと思います。ボクと一緒に依頼を……冒険をしてくださって、ありがとうございます。」

旅人はゴーグルを着けるとモトラドに跨がり、アクセルを軽くあおった。

エンジンが快調に吹け上がる。

「では、さようなら」

冒険者達は、土煙を上げて走り去るモトラドをしばらく眺めていた。

「良い街だったね」

「うん、料理も美味しかったし、何より珍しいものを沢山見られた」

「見たかったな、ゴブリンの巨人」

「死体は見たじゃん」

「生きて歩いてるところを、だよ。」

「次の街にはどんなものがあるんだろうね」

「やっぱりそこでも冒険するの？」

「まあ、それ以外にお金稼ぐ手段見つからないし。割も良いし」

「慣れてきたねえ。放り放つてはホーリー設えだね」

「そうだね」

気の抜けた会話を続けていると、モトラドが言った。

「この方角で合ってる？」

「多分。道に沿って走ってるし、間違えることはないと思うよ」

「道、ある？」

促されて見てみると、いつの間にか踏み固められた道は消えて無くなっていた。

「あれ、いつの間に」

アクセルを止め、惰性で減速して停車すると、モトラドから降りた。ジャケットのポケットから方位磁針を取り出した。

「まじか……」

「どうしたの？」

「旅人は黙って方位磁針をガソリンタンクに向けた。

方位磁針の針はぐるぐると回っている。

「まただね」

「……ここか……」

「折角だし着けてみるか」

旅人はゴブリンスレイヤーからもらった水中呼吸の指輪を、右手の手袋を外して人差し指にはめた。

途端に薄い膜が張られた様な感覚と共に凍てつく寒さも、冷たい空気も離れていった。

やがて、突如視界を埋めるほどの吹雪に見舞われ、何も見えなくなつた。

「……ここは、何処だ？」

気がつくくと、太陽は沈んで夜になっていた。

風はなく、エンジンを切った今は静寂しか無い。

「どうやら元の世界に戻ってきたみたいだね。空を見てご覧よ」

黙って見上げると綺麗な満月が一つ、満点の星の中に浮いている。

緑の月は、無い。

「じゃあ、向こうの方にある城壁に囲まれているのは」

「新しい国じゃないかな？」

「最初に行こうとしてたお菓子之国かな……。甘い匂いがするし」

キノはため息を吐くと、目をつむって下を向いた。

「……なんというか、探し物をしていたら昔諦めた物が先に見つかったような」

「その心は？」

「嬉しいけど今じゃ無い……」

キノは目を開けると、

「じゃあ、行こうか、エルメス」

「はいはい。安全運転よろしくね、キノ」

「……？」

「どうしたのさ」

「なんか、久々にエルメスの名前を呼んだ気がして」

「そういえば、キノってしばらく呼んでなかったような」

「まあ、いいか」

「そだね」

キノは、水中呼吸の指輪をポケットに戻すと、手袋をはめ、エルメスに跨がった。キックスターターを蹴り飛ばしてエンジンをかけると、サンドスタンドを戻した。

「じゃあ改めて。行こうか、エルメス」

「そうだね、キノ」

エルメスを発進させた。